

愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告 第8集

か  
加 美 遺 跡

1989

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

一部の挿図・図版に縮尺が  
欠落していました。おわび  
して訂正します。

第6図  $S = 1 / 20$

第7図  $S = 1 / 100$

図版2～5  $S = 1 / 200$

## 序

愛知県安城市は今日、名古屋市などのベッドタウン化が進行しつつありますが、まだまだ郊外にはのどかな田園風景もみられ、従来社会科の教科書などにみる「日本のデンマーク」のイメージを感じ取ることもできます。歴史的には、特に肥沃な岡崎平野を望む碧海台地の縁辺部を中心とした一帯に、先人の足跡である多くの文化財が残されています。

このたび、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、県道碧海桜井停車場～中島線工事ともなう事前調査として、安城市小川町地内の加美遺跡の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、特に古代・中世の、竪穴住居・掘立柱建物により構成される集落遺跡を見出すことができ、さらに安城ヶ原に生きた人々の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。そして今回これらの調査成果をまとめ、ここに報告書を刊行するに至りました。本書が歴史資料として活用され、埋蔵文化財に対する御理解を深める一助となれば幸せに存じます。

発掘調査の実施にあたりましては、地元住民の方々をはじめ、関係機関及び関係者の御指導と御協力をいただきましたことに対し、深く感謝申し上げる次第であります。

平成元年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター  
理事長 中根昭二

# 目 次

1章 調査の経緯 .....	1
(1) 調査の経緯・経過 .....	1
(2) 位置と地形・環境 .....	2
2章 層位と遺構 .....	4
(1) 基本層位 .....	4
(2) 遺 構 .....	5
3章 遺 物 .....	12
(1) 土器・陶器 .....	12
(2) 金属製品 .....	26
(3) 石 製 品 .....	28
(4) その他の遺物 .....	28
4章 考 察 .....	30
(1) 遺構の時期別変遷 .....	30
(2) 中世土器について .....	32
(3) 火葬施設について .....	40
(4) SX01~06出土骨片について .....	42
5章 ま と め .....	43
別 表 .....	45

## 挿 図 目 次

第1図	調査の進行状況……………	1	第17図	遺物実測図⑩……………	28
第2図	加美遺跡と周辺の遺跡……………	3	第18図	銭貨拓影……………	28
第3図	土層図……………	4	第19図	遺物実測図⑪……………	28
第4図	周溝墓実測図……………	5	第20図	砥石……………	29
第5図	竪穴住居の切り合い……………	6	第21図	弥生時代中期以前の土器……………	29
第6図	土坑C実測図……………	9	第22図	製塩土器……………	29
第7図	火葬施設実測図……………	10	第23図	瓦……………	29
第8図	遺物実測図①……………	12	第24図	遺構の時期別変遷……………	31
第9図	遺物実測図②……………	15	第25図	中世土器の分類……………	33
第10図	遺物実測図③……………	17	第26図	比較資料実測図①……………	34
第11図	遺物実測図④……………	18	第27図	比較資料実測図②……………	35
第12図	遺物実測図⑤……………	19	第28図	比較資料実測図③……………	36
第13図	遺物実測図⑥……………	22	第29図	鍋Aの細分と伴出資料……………	38
第14図	遺物実測図⑦……………	23	第30図	鍋E・釜C……………	38
第15図	遺物実測図⑧……………	25	第31図	肋骨(SX03)……………	42
第16図	遺物実測図⑨……………	27			

## 表 目 次

第1表	比較資料法量表……………	36
-----	--------------	----

## 図 版 目 次

図版1	周辺地形	図版10	遺構②
図版2	遺構図①	図版11	遺構③
図版3	遺構図②	図版12	遺構④
図版4	遺構図③	図版13	遺構⑤
図版5	遺構図④	図版14	I・II期遺物
図版6	遺構図⑤	図版15	II期遺物
図版7	航空写真	図版16	II・III期遺物
図版8	調査前風景・遺構遠景	図版17	III期遺物
図版9	遺構①	図版18	III期遺物・その他の遺物

## 例 言

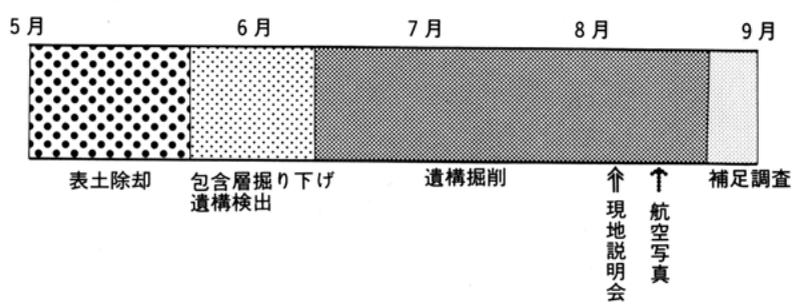
1. 本書は、愛知県安城市小川町加美に所在する加美遺跡(54129)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県土木部がすすめている県道碧海桜井停車場～中島線に伴うもので、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和63年5月～8月である。
4. 発掘調査は、土屋利男、池本正明、菅沼良則が担当した。
5. 調査に際しては、次の機関の指導、協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課、愛知県土木部、安城市教育委員会
6. 遺物の整理・製図等については次の方々との協力を得た。  
石川陽子、稲垣智子、磯谷緑、大見一子、乙部加代子、斉藤たき子、鈴木香、富田崇子、平野視子、柵木えみ子(五十音順、敬称略)
7. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標VII系に準拠した。
8. 本書の執筆は池本が担当したが、2章(2)①、3章(1)①については菅沼、4章(3)については森勇一、佐藤治による。
9. 報告書をまとめるにあたり、次の方々に御教示、御協力を賜った。  
天野暢保、荒井信貴、伊藤久美子、伊藤稔、内田智久、江崎武、江畑俊行、遠藤才文、岡本茂史、奥村勝信、加藤安信、川崎みどり、黒柳輝夫、小山正文、斉藤嘉彦、鈴木和雄、中野晴久、永見武夫、檜崎彰一、松井直樹、三宅唯美、六辻澄男、藤澤良祐(敬称略、五十音順)
10. 本書の編集は池本が担当した。
11. 調査に関する資料は全て(財)愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 1章 調査の経緯

## (1) 調査の経緯・経過

愛知県土木部では、矢作川小川橋整備に伴う交通量調整を目的として、県道碧海桜井停車場～中島線工事を開始している。新県道の予定用地は、小川町集落の畑作地帯を東西に横切る設計である。ところがこの一帯には、古代・中世の土器片が散布しており、ここに遺跡の存在が考えられた。このため予定用地内については記録保存の必要性が生じ、県道工事前の事前調査として、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じ委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施したものである。今回報告する加美遺跡の発掘調査は、この成果をまとめたものである。

調査を進めるにあたり、調査区は、A～C区の三地区に分割して設定した。総面積は、2,500㎡である。調査方法は現地表面より耕作土のみをバックホウにより除去した後、手掘りで包含層を掘削した。包含層の厚土は30cm程度みられるが、同層中の遺構検出は困難で結果的には碧海面と呼称される洪積層上面で遺構を検出する方法をとった。作業工程は下図に示す段取りで実施し、調査期間は昭和63年5月～8月の4ヶ月間である。なお、発掘調査の進行に伴い、現地説明会を開催し、作業員・地元住民に調査への御理解と御協力を御願いするとともに、埋蔵文化財保護の啓発・普及に努めた。



第1図 調査の進行状況

## (2) 位置と地形・環境

西三河平野部の地形を面的に見ると、高位より藤岡面・三好面・拳母面・碧海面・越戸面といった5段の段丘面と沖積面とに大別できる。この中で碧海面は第四氷期に堆積した碧海層を基盤にしており、洪積面中最も広範囲にみられるもので、標高80mから5mまで緩やかな傾斜をもって発達している。そして現在の安城市域の大半はこれに占められ、市街地もしくは耕地として利用されている。しかしこの今日の姿は明治用水開通後形成されたもので、それ以前は一面の荒野だったと言われている。

加美遺跡はこの碧海面東縁部に所在している。所在地の標高は12mで、東側には低地をのぞんでいる。この地点は現在畑地及び宅地で、名鉄西尾線碧海桜井駅より南東1.2km、安城市立小川保育園の南東にあたる。

次に加美遺跡周辺の遺跡を概観する。碧海台地及びその付近には多くの遺跡が残されているが、縄文時代以前の遺跡はいくつかの地点で石鏃が採集されているのみで不明確である。この状況は次の弥生時代についても基本的には同様で、北方2.5kmには古井遺跡群(54088~54093)<sup>①</sup>の成立を見るが、加美遺跡周辺部では、寄島遺跡(54124)、下懸遺跡(54127)などの存在が確認されているにすぎない。

古墳時代に入ると、ここでもようやく遺跡の拡がりか面として展開するようになる。具体的には姫小川古墳(5401)、五砂山古墳(55032)、加美古墳(54123)、姫下遺跡(54121)、小川三ツ塚遺跡(54122)、五反田遺跡(54130)、大畑遺跡(54138)、志貴野遺跡(55015)などがこれにあたる。また、奈良時代には寺領廃寺(5443)も創建される。なお、大久根遺跡(54125)は1959年の土採り工事中に焼土や灰とともに多量の奈良時代に属する瓦が出土したと言われる地点で、寺領廃寺瓦窯と推定されている。

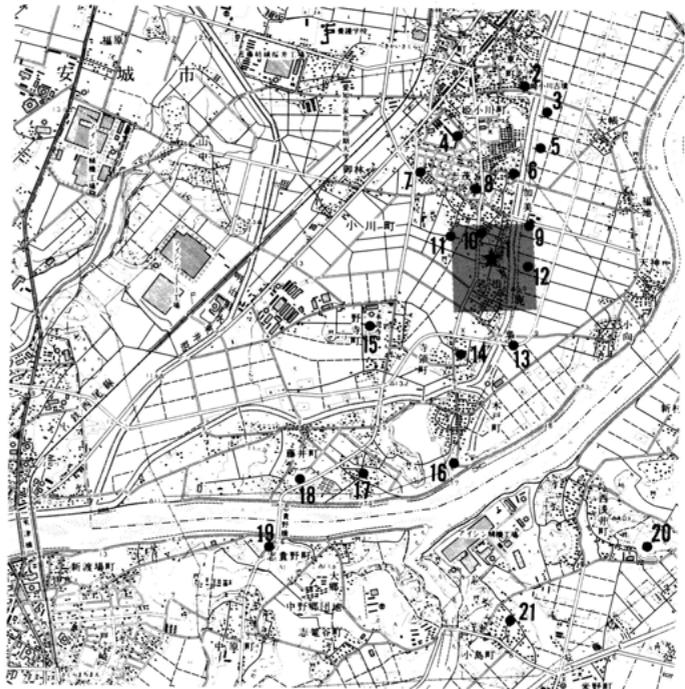
中世に入ると生活圏はさらに拡大し、新たに的場遺跡(54120)、惣作遺跡(54132)などが加わり、碧海面の東縁部ではいたる所に遺跡を見ることができるようになる。やがて15世紀に入ると西三河地方では急速に本願寺派寺院が発達した。本證寺(5403)はこの頂点に立った寺の1つで、多くの末寺、道場を通じて膨大な数の門徒を宗教的に掌握し、政治的にも大きな力を有していた。

中世城館も周辺ではいくつか知られている。小川城は石川氏の拠点である(消失)。石川氏は在地領主で、松平信光の安祥城進出後は松平氏に家臣化する。この他には藤井城(5444)、木戸城(5445)などが知られるが、いずれも城と呼ぶべき規模をそなえたものではない。

①遺跡番号は、愛知県教育委員会『愛知県遺跡分布地図(II)知多・西三河』1988による



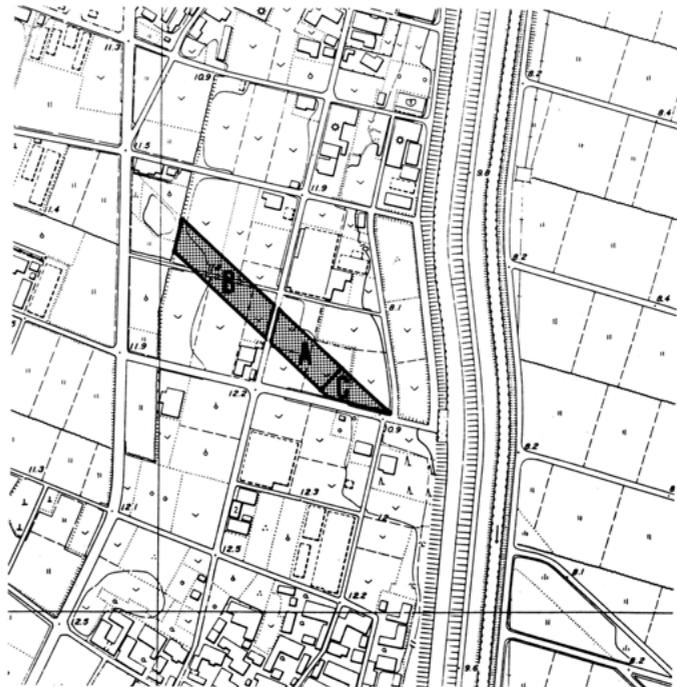
- 1 加美遺跡
- 2 姫小川古墳
- 3 姫下遺跡
- 4 的場遺跡
- 5 寄島遺跡
- 6 加美古墳
- 7 小川三ツ塚遺跡
- 8 小川城
- 9 下懸遺跡
- 10 加美地下式埜
- 11 大久根遺跡
- 12 五反田遺跡
- 13 惣作遺跡
- 14 寺領廃寺
- 15 本證寺
- 16 木戸城
- 17 藤井城
- 18 大畑遺跡
- 19 志貴野遺跡
- 20 五砂山古墳
- 21 小島銅鐸出土地



(周辺の遺跡)

S = 1/50000

この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図西尾を使用したものである



(調査区)

S = 1/5000

第2図 加美遺跡と周辺の遺跡

## 2章 層位と遺構

### (1) 基本層位

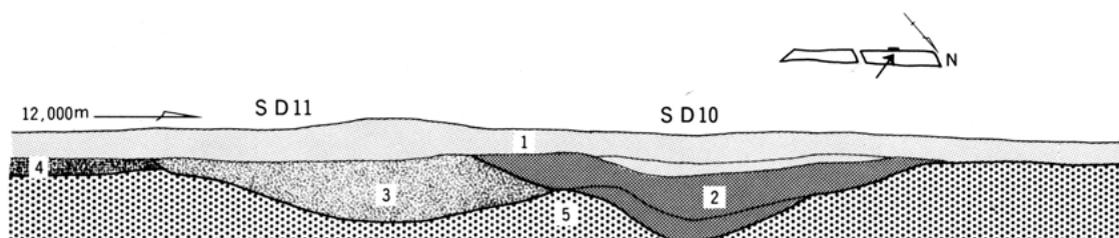
調査区の標高は12mとほぼ平坦な土地である。基本的な層位は、灰色土層(1層), 淡茶褐色土層(2層), 赤褐色粘土層(3層), 黄褐色細砂層(4層)である。

1層: 耕作土層で, 厚さは30cm程度, 軟質である。調査区の全域を覆っており, ローリングの著しい古代~近世の土器片にまざって現代ビニール片などを含む。

2層: 厚さは10~30cm程度でやや締まっている。包含属で炭化物, 焼土, 3層ブロックなども含むが, これらの比率により二層に分けられる。分布状況は上層がB区中央の一部を除いた全面にみられるのに対し, 下層はA区・B区東方を中心としたやや狭い範囲に見られる。下図に示すように, 断面観察によれば, 下層を切り込む遺構も見ることができるが, 2層中で面的に遺構を捉えることは困難で, 2層下で全ての遺構を検出している。

3層: 厚さは100cm程度でほぼ均質で固く締まっている。碧海層と呼ばれる洪積層で, 上面が遺構検出面となっている。色調は赤褐色を呈するが, 下部は黄味を帯びている。

4層: 厚さは確認できなかった。バサバサとして崩れやすい土層である。直径1~3cm大のチャート転石を含む。



- |                  |         |
|------------------|---------|
| 1 表土             | 4 淡茶褐色土 |
| 2 淡灰褐色土 (SD10埋土) | 5 赤褐色土  |
| 3 暗灰褐色土 (SD11埋土) |         |

第3図 土層図

## (2) 遺 構

加美遺跡より検出した遺構は大きく3つの時期に区分できる。ここでは年代順に①弥生時代中期、②古墳時代～平安時代、③室町時代～安土桃山時代と区分する。

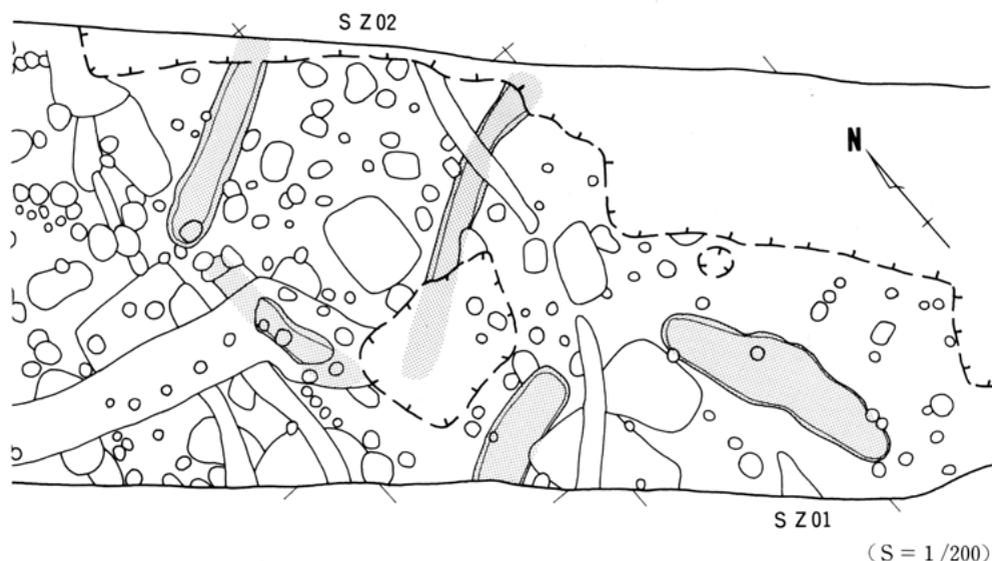
以下、時期別に各遺構毎を種類別に説明する。なお、時期別の配置、組み合わせ、変遷などは5章で後述する。

### ①弥生時代中期

弥生時代中期に属する遺構は、方形周溝墓2基が検出されている。これらは調査区東端部に位置する。残存状況は悪く、主に後世の溝や掘立柱建物等に大部分が削られ基底部を残すのみである。周溝埋土中より弥生時代中期後葉の土器が出土した。

**S Z 01** 北東、北西隅に陸橋部が付く。主軸方向は、真北に対し、23度西に振る。北溝は、幅約1.3m、深さ0.1～0.15m、東溝は、長さ6.8m、幅約1.5m、深さ0.1～0.15mで、いずれも断面U字形である。溝を含めた南北長は、約11mと推定できる。

**S Z 02** 北西・南西隅に陸橋部が付く。主軸方向は、真北に対し、31度西に振る。北溝は、幅1.1m、深さ0.25～0.3m、南溝は、幅0.8m、深さ0.1～0.2m、西溝は、後世の溝にほぼ全体を削平されており不明な点が多いが、現状で、長さ約5m、幅約0.9m、深さ0.1mを確認できる。いずれも断面U字形である。周溝を含めた南北は7.5mと計測できる。



第4図 周溝墓実測図

## ②古墳時代～平安時代

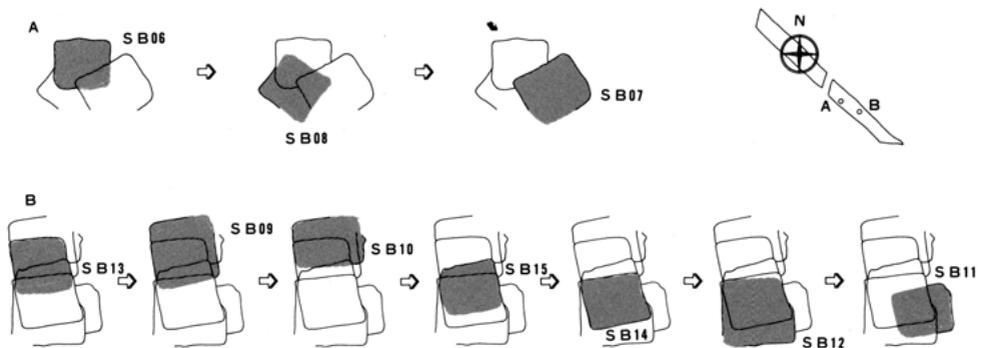
古墳時代～平安時代に属する遺構は、竪穴住居15棟の他、多数の土坑などが見られ、調査区は居住域として利用されていたことが考えられる。遺構の分布域も拡がり、調査区のほぼ全域で検出できるようになるが、A・C区に集中する傾向がみられる。

### 竪穴住居

竪穴住居は15棟検出された。これらは基本的に平面形が正方形を呈し、検出面からの掘り込みは20～30cm程度である。一辺4～5m程度のものが9軒と最も多く、一辺7.5mをはかる例（SB12）も存在する。これらは概して時期が新しくなると小型化し、平面形もやや不整形になる傾向がみられるが個々の計測値等は巻末の遺構一覧表を参照とする。床面外縁には幅20cm、深さ10cm程度の周溝が検出できるものが一般的ではあるが、四辺全てに連続して確認できる例はなく、全て数ヶ所にわたり周溝のとぎれた部分が検出される。支柱穴については明確にできない例が多い。また壁面には一辺に幅20～30cm程度のわずかな突出部を有しているものも見られ、ここでは床面の被熱が観察できる他、埋土中に焼土・炭化物が見られ、状況からカマドを想定することができる。なおこの様子を確認できたのは、SB02・10・13・17の4棟のみである。またSB06は床面に直径20cm程度のほぼ円形を呈す被熱部分や付属施設SK16をみることができる。

### 土坑A

土坑として確認できたのは数十例見られるが、そのうち、特色のあるSK11・SK28についてのみ特に土坑Aとして取り上げておく。これらは平面形が直径1.0m程度のややひしゃげた円形で、それぞれ埋土中より置カマド（SK11）、把手付甕（SK28）が出土している。いずれも後世の土坑に一部破壊されているが、最初は完形であったことを推定させる出土状況をみせており、土器を埋納する用途を有したものと推定できる。



第5図 竪穴住居の切り合い（S = 1/500）

### ③室町時代～安土桃山時代

室町時代～安土桃山時代に属する遺構は、全面に溝による地割りが設定された様子が窺え、この中には掘立柱建物が見られる空間も確認できる。従って調査区が居住域として利用されていたことが考えられる。遺構の分布域は調査区全面に及ぶ。

#### 溝

##### S D01・04

やや浅い溝で、大きさはS D01が、幅1.3m、深さ0.2m、S D04が幅0.7m、深さ0.1mをはかり、ほぼ直交して区画を形成する。埋土からは15世紀代の遺物が出土するが、S D01には三ヶ所、ごく少量の貝殻の堆積がみられた。

##### S D03・05・07・27・30・35

やや深い溝で、幅2.0m、深さ0.5m、前後をはかる。これらはほぼ同時期と考えられ、16世紀代の遺物を出土する。S D03とS D07、S D05とS D27、S D27とS D30、S D35でそれぞれの区画を形成する。なお、S D27は上面を底部付近にまで大きく攪乱を受け、S D35は先端部分で一部攪乱を受けるが、強く外反して終息する。

##### S D17・18・19・20

やや浅い溝で、大きさは幅0.6m、深さ0.2m前後をはかる。これらは一棟の掘立柱建物を囲む溝で、形状からいずれもほぼ同時期である可能性が高い。S D17・18の埋土中からは、それぞれ16世紀代の遺物が出土している。S D17は掘立柱建物の西側を画する溝で、先端部分は外側に強く屈曲して終息する。S D18は、S D19と直交し、「L」字状に大きく屈曲し、S B02とわずかに接し、終息する。S D19は、S D18との交点より直線的に伸び、東側を攪乱により破壊される。S D20は南端部分を検出したのみであるが、先端部分はS D17と同様大きく屈曲している。

##### S D08・11・30・31・32

S D11を除きやや浅い溝で幅0.2m、深さ0.3m前後をはかる。これらの溝で、後述する火葬施設を含む空間を区画する。S D08・30・31の埋土中からは、それぞれ15世紀代期の遺物が出土している。S D08とS D11はそれぞれ西端と北端を接し調査区外に伸び、火葬施設を含む空間の西側と北側を区画し、S D30・32は東側を区画している。S D30は南部分で西側に屈曲し、空間の南側をも意識している可能性がある。なおS D31は調査区内で、10mを検出し、南端は終息する。

## 掘立柱建物

確認し得たのは13棟であるが、未確認のものも存在する可能性は残されている。確認されたものは2×3ないし2×4程度の規模で、中には柱通りの悪いもの（S B21・22・25・27）も含まれている。柱穴は基本的に平面円形で、直径0.3m程度の掘り方を有するものが多いが、0.8m程度の掘り方を有するもの（S B25）、隅丸方形の掘り方を持つもの（S B24・25）もみられる。なお、S B22・23は、溝により囲まれている。

## 柵

S B01はS D03の西側から直角に曲がり、S D07の北側をそれぞれに並行して走る柵で、9ヶ所の柱穴を確認している。柱間是不揃いで、北から、3.1—3.5—3.2—3.0—1.4—2.5—1.7—2.3mである。

## 井戸

平面円形を呈し、直径1.0m、深さ3.2mで、埋土中より井戸枠または抜き取り痕は確認することができなかった。出土遺物は、16世紀頃に属する小片が見られた。

## 土坑

土坑として確認できたのは多数みられるが、その内特色のある3基についてのみ特にとりあげておく。

### 土坑B（S K04）

平面長楕円形を呈し、長径3.1m、短径1.8m、深さ1.0mをはかる。底面が上面より大きく袋状を呈している。埋土中には貝殻が薄く堆積しているのがみられ、破棄土坑として利用されたことが推定できる。埋土中から15世紀頃の遺物がみられた。

### 土坑C（S K17・18）

平面が円形を呈する形状で、底面で大きく広がる。直径はS K17が2.2m、S K18が1.1mだが、深さは前者が2.9m、後者が2.5mと検出面の形状に比して異常に深い。調査に際しては、それぞれの底面が、検出面である赤褐色粘土層を掘り抜き、すでに黄褐色細砂層に達していることから、検出面から掘り下げると崩壊の危険性が考えられ、記録と並行し、一旦検出面を全面2m程度掘り下げてから底面を再検出する方法を取らざるを得なかった。なお埋土中からは双方ともに15世紀末頃の遺物が見られたが、前者が比較的豊富なのに対し、後者は1点のみで、差異が認められる。S K17・18ともに埋土中には空洞部分もかなり多く認められ、空洞を意識した用途を有している可能性も推定される。

## 火葬施設

火葬施設は5基確認されている。いずれも前述したS D08・11・13により囲まれた空間中に限って分布し、これらと有機的関連を窺わせる。S X02を除く共通の特色は、①埋土

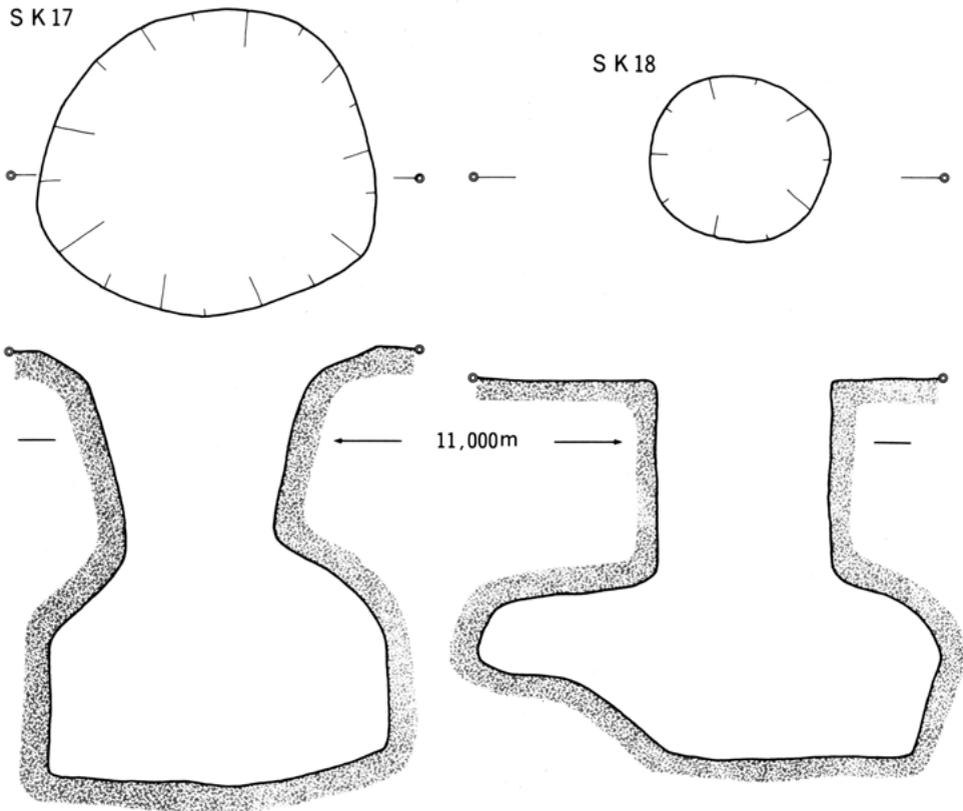
下層に灰が堆積し、骨片、炭化材片、焼土塊などを含む。②壁面（ないし床面）は被熱している。③骨片の出土状況は、まとめられたような様子はみられず、散在的である。④骨片は細片化しており、原形を留めるものは検出できない。⑤出土遺物は乏しい、などをあげることができる。

火葬施設は壁面（ないし床面）が強く被熱し固く焼け締まるもの（火葬施設A）と、あまり被熱しないもの（火葬施設B）とに分類できる。

### 火葬施設 A

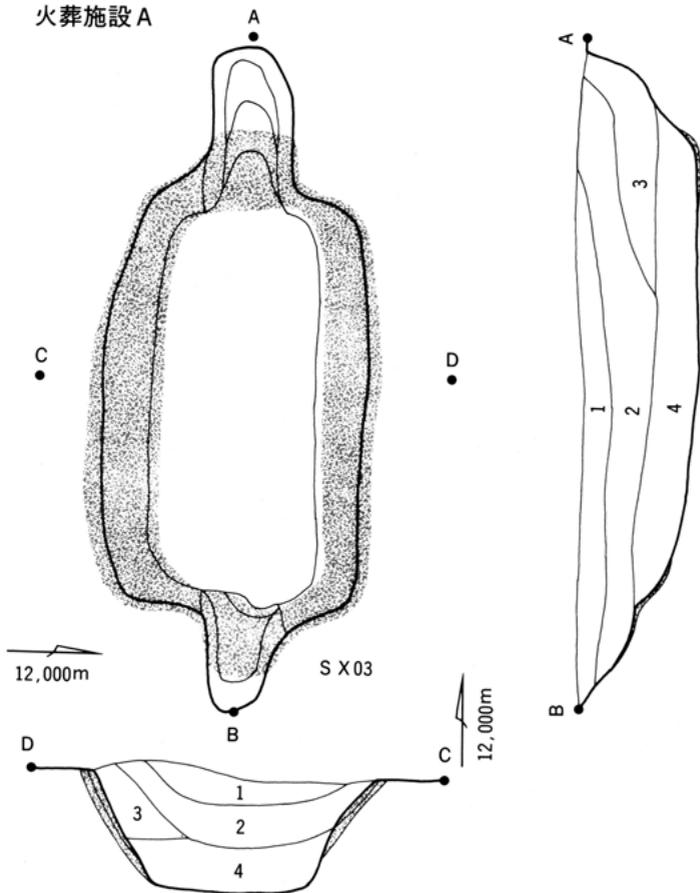
#### S X 01

S X 01は底面を、長辺1.0m、短辺0.5m残すのみで、残存状態は不良であるが、中央に幅0.2m程度の小溝を有していることを窺うことができる。底面には被熱し、最も厚い所で2 cm程度赤く変色している他、粘土による補修痕もみられる。出土遺物は銅製品（第17図178）がみられた。

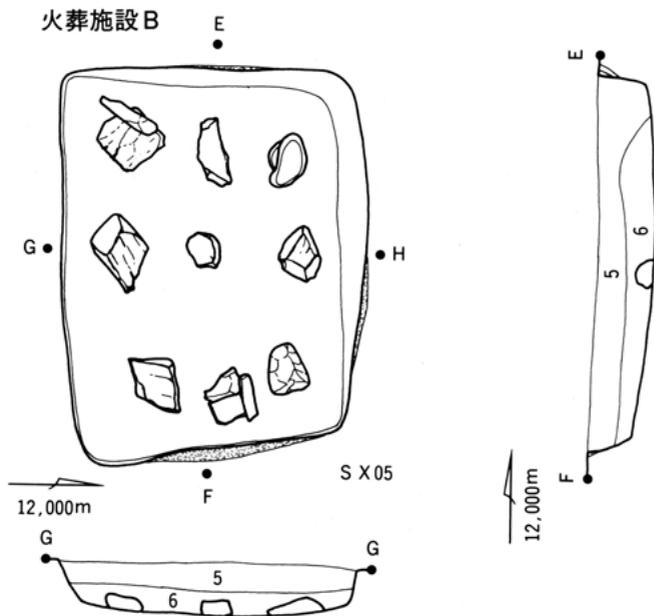


第6図 土坑 C 実測図

火葬施設 A



火葬施設 B



- 1 淡茶褐色土  
粒子ややあらく粘性あり、  
淡化物、焼土まれ。
- 2 淡赤茶褐色土 I  
1層に5mm大の焼土ブロッ  
クを含む。粒子ややあらく粘  
性低い。
- 3 淡赤茶褐色土 II  
1層に5~15mm大の砂粒を  
含む。粒子ややあらく粘性低  
い。骨片含む。
- 4 暗灰色灰層  
3層に灰が多量。骨片含む。
- 5 淡灰茶褐色土  
粒子ややあらく粘性低い。  
2cm大焼土若干混。
- 6 暗灰茶褐色灰層  
5層に多量の灰もしくは炭  
化物。骨片。

第7図 火葬施設実測図

1:20

トーンは被熱部分を表現する。

## S X02

長径1.3m、短径0.7mをはかる楕円形の土坑で、床面は被熱により赤く変色している。埋土からは骨片・炭化材片は見られず、やや特異ではあるが、形状及び主軸の方向が他の火葬施設と一致していること、火葬施設の所在する空間に位置することなどから、一応火葬施設に含めた。

## S X03

S X03は長辺1.2m、短辺0.7mをはかる長方形の土坑で、残存状況は良好である。短辺両側には幅0.2m、長さ0.2mの突出部がみられる。壁面は強く被熱し、2cm程赤く変色している他、粘土による補修痕及びそれに伴う工具痕もみられる。貼土の厚さは最も大きい部分で2cmをはかる。なお、床面には被熱を観察することができない。

## S X04

S X04は底面を長辺1.0m、短辺0.4m残すのみで、残存状況は不良である。S D10・S B08掘り下げの時、気付かずに一部を壊してしまった。従って切り合い関係ではS X04はS D10・S B06・08より新しい。

## 火葬施設B

### S X05

S X05は長辺1.0m、短辺0.8mをはかる長方形の土坑で、壁面は部分的に薄く被熱した部分を観察することができるが、床面では見ることはできない。底面には、河原石13個を3列ずつ9箇所並べている。石の上面でのレベルはほぼ同一で、これらの河原石が棺台として用いられたことを想定させる。なおこれらの石材は領家変成岩・珪質片岩が多く、特に選材に関しては特色を見出すことができない。全て被熱の状況が確認できる。S B06と切り合い、S X05の方が新しい。

## 埋納土坑

### S X06

S X06は長径0.5m、短径0.4mとほぼ円形の土坑で、埋土中より多量の骨片を確認することができる。骨片は前述した火葬施設同様細片化してはいるが、出土部分が検出面より深さ20cm程度に集中していること、骨片を含む層位には焼土・炭化材片・焼土塊などは見られず、壁画にも被熱の状況が確認できないことなどから、人為的な集骨後、骨片のみをまとめて埋納したことが考えられ、埋納土坑として分類した。S X06は、S B05と切り合い関係を有し、S X06の方が新しい。なお、出土遺物はII期に属する極少片を数点見ることができたが、これらからは二次的の被熱は観察できなかった。

# 3 章 遺 物

調査により出土した遺物は、土器・陶磁器類・金属製品・石製品などがみられるが、量的には土器・陶磁器類が圧倒的に多い。

以下、出土遺物について時期別に説明を加えるわけだが、記述の混乱をさけるため土器・陶磁器類の種類と器種について事前に若干の整理を行う。

## 種 類

種類としては土器と陶磁器があり、前者は弥生土器と土師器、後者は須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・施釉陶器・中国陶磁と通例に従い呼称する。

## 器 種

器種には碗・杯・蓋・皿・壺（瓶）・甕・鉢・置カマド・甑・甗・鍋・釜等を用いる。ただし施釉陶器については、「天目茶碗」「四耳壺」「縁釉皿」などの呼称を便宜的に使用する。

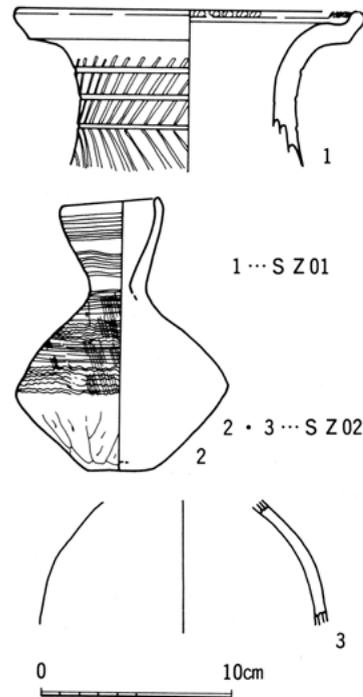
なお法量は巻末の付表を参照とする。

## (1) 土 器・陶 器

### ①弥生時代

S Z 01 1は壺で、淡茶褐色を呈し、体部以下を欠失する。受口状口縁を有する口縁部内側には相対するように指押さえが見られる。頸部外面にはへらによる羽状の沈線や平行沈線を施す。北周溝出土で弥生時代中期後葉。

S Z 02 2も壺で、淡茶褐色を呈し、完形である。袋状を呈する口縁部を有し、体部は強く張る算盤玉形である。全体に磨滅が著しいが、肩部より胴部上半にかけてハケメ調整痕、下胴部には縦方向のへら削り痕が確認できる。口縁部より胴部上半までややゆがむ文様帯が6段施される。南溝出土で、弥生時代中期後葉。3も壺で、灰色を呈するが全体に磨滅が著しい。胴部上半のみ残存し、2に比してやや丸味を帯びる。北溝出土。弥生時代中期後葉。



第8図 遺物実測図①

## ②古墳時代～平安時代

S B 01 4・5は須恵器杯の底部片である。いずれも高台を有し、4は外底部に回転ヘラ削り痕を確認できる。8世紀頃に位置付けられる。

S B 01 6・7は須恵器杯。いずれも焼成不良で明黄褐色を呈する。外底部は6が静止ヘラ削り痕、7が回転糸切り痕を確認できる。8は灰釉陶器長頸瓶のいわゆるミニチュアだが、蓋状の器形に付く装飾部片である。色調は淡灰色を呈する。全体に淡緑色の灰釉がみられる。9は土師器甕で、製作技法は表面が磨滅し明らかにできないが内面では粘土輪積み痕が観察できる。器壁は非常に薄く、被熱している。6～8は8世紀後半に属する。9も同一時期か。

S B 03 10は山茶碗で高台を有する。小型のいわゆる小碗で、外底部には回転糸切り痕を残す。高台端部にモミ痕は観察できない。埋土上層より出土。12世紀。

S B 04 11・12ともに土師器である。11は体部にハケメ調整痕を残す。下胴部は欠失するが、長胴形を呈するの。12は高杯の杯部である。双方接するような形で出土している。時期は特定できない。

S B 05 13～15は須恵器杯。13は高台を有し、外底部は回転ヘラ削りを施す。19は須恵器ややつぶれた球形の体部に、短く直立し端部で外反する口縁部を有する壺で、20は同一器形の底部とも考えられる。外底部に回転糸切り痕を残す。やや生焼けである。17・18は須恵器蓋である。ともに天井部外面には回転ヘラ削り痕を確認できる。17は宝珠鈕を有するが、18は上面を欠落する。21は土師器甕である。13～17は8世紀後半。19～21もほぼ同時期か。

S B 06 22・23は須恵器杯、24は土師器高杯、杯部下方には突帯がめぐる。25は土師器甕で、長胴形を呈するものか。頸部・口端部の横ナデを除きハケメ調整痕を確認できる。24が6世紀。他はやや下る。

S B 07 26は須恵器杯で高台を有し、外底部に回転ヘラ削り痕を確認できる。27は須恵器蓋で、天井部外面に見られる回転ヘラ削りはやや雑で、口縁部の形状も退化傾向がみられる。28は須恵器甕で器壁は薄く、ゆるやかに外反する。頸部中程には突帯を持つ。29は灰釉陶器・短頸壺で、肩部以下を欠くが、球形の体部に短く直立する口縁部を有する形状でミニチュアである。色調は灰白色を呈し、体部外面、口縁部内面には淡緑色の灰釉がみられる。30は土師器皿で暗茶色を呈し、使用胎土は緻密ではない。表面が磨滅し不明確ではあるが、わずかに外面にヘラ磨き痕、内面に放射状暗文を観察できる。26～28・30は8世紀前半頃、29はやや下る。

S B 08 31は須恵器杯蓋。天井部外面は回転ヘラ削りを施されるが雑で、生焼けである。

32は土師器高杯で表面が磨滅し製作技法は不明確であるが、成形にロクロを使用している。

31は7世紀前半頃、32もほぼ同期か。

**S B 10** 33は須恵器杯で、高台を有し、外面底部にヘラ削り痕を確認できる。床面に密着して出土している。34～36は灰釉陶器碗だが、34は三ヶ月形の高台を有し、外底部には回転ヘラ削り痕、口縁部には灰釉ハケ塗り痕を確認できる。埋土の上層から出土している。

35・36は高台のつくりが雑で、退化傾向が見られる。外底部には回転糸切り痕を残す。37は土師器高杯で、表面が磨滅し製作技法は不明確であるが、成形にロクロを使用している。

30は8世紀。34～36はこれより下る。

**S B 12** 38は須恵器蓋で、宝珠鈕を有し、天井部外面には回転ヘラ削り痕が見られるが、やや雑である。この部分には通常須恵器甕に見られるような黄土ハケ塗りが施された可能性がある。39は土師器壺で、下胴部を欠くが、球形の胴部に丸味を帯びて外反する口縁部を有する形状をとる。外面にはハケメ調整痕、内面には指ナデ調整痕を確認できる。38は8世紀、39もほぼ同時期か。

**S B 14** 40は須恵器杯で高台を有し、外面底部にヘラ削り痕を確認できる。体部は深く、コップ状を呈する。やや生焼けである。8世紀後半。

**S K 02** 41は須恵器甕で、体部に平行叩き痕を残す。頸部には二条の沈線とその間に刺突文を施す文様帯がみられる。生焼けである。時期は特定できない。

**S K 05** 42は土師器甕で、体部の形状は明らかではないが、頸部はほぼ直立し、口縁は短く外反する。外面及び頸部内面はハケメ調整痕、体部内面は指ナデ調整痕を残す。時期は特定できない。

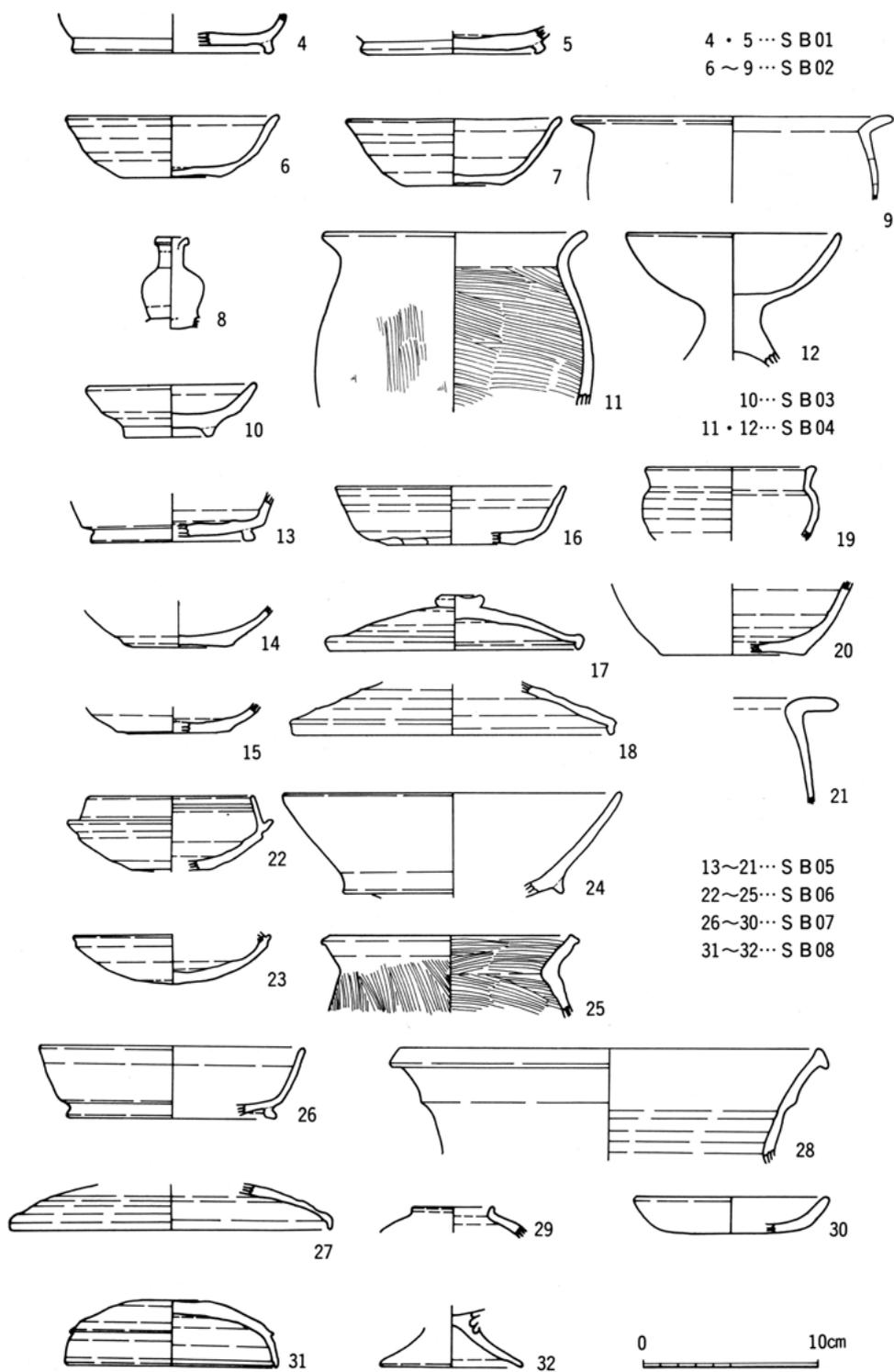
**S K 06** 43は土師器甕で、下胴部以下を欠く。表面が磨滅し、製作技法は不明確である。二次的に被熱している。時期は特定できない。

**S K 12** 44は土師器甕である。表面が磨滅し製作技法は明らかにできない。時期は特定できない。

**S K 14** 45は土師器甕である。表面が磨滅し製作技法は明らかにできない。把手を有するが先端部は欠失する。二次的に被熱している。時期は特定できない。

**S K 15** 46は灰釉陶器碗で底部を欠く。施釉痕は確認できない。口縁部直下の外面に墨書が見られるが判読はできない。47は土師器甕である。表面が磨滅し、製作技法は明らかにできない。46は9世紀後半～10世紀、47もほぼ同一時期か。

**S K 16** S K 16はS B 06床面の付属施設である。48は土師器二重口縁壺で口縁部下方に粗雑な突帯を有する。49は土師器甕で球形平底の体部に外反する短い口縁部を有し、最大径付近に直径11mmの穿孔を受ける。須恵器甕を意識した形状をとる。体部の内面に縦方向の



第9図 遺物実測図②

指ナデ痕，口縁部は横ナデ調整され，非ロクロである。50・51は土師器高杯で，突帯の有無にこだわらなければ24に類似する。52は高杯の脚部である。48～52は密集して出土しており6世紀頃に属する。

S K 20 53・54は須恵器杯の底部片である。いずれも高台を有し，調整はシャープである。外底部に回転ヘラ削り痕を確認できる。55は須恵器蓋で宝珠鈕を有している。面にかえりを有する。調整はシャープである。56は須恵器壺で，やや肩のはった体部を有し，最大径付近には把手を有する他，沈線が2条めぐる。

S K 22 57・58は須恵器蓋である。57は宝珠鈕を有し，天井部外面には回転ヘラ削り痕，内面には布圧痕がみられる。58は内面にかえりを有する形状をとる。59は土師器甕で，口縁部のみ残存する。表面が風化し，製作技法は不明確である。58は7世紀後半，57は同時期かやや下る。59は57・58とほぼ同時期か。

S K 24 60・61は須恵器杯である。60は高台を有する。調整はシャープである。外底部には回転ヘラ削り痕を確認できる。61は底部のみ残存する。外底部にはヘラ切り痕が確認できる。

S K 25 62は灰釉陶器碗で高台を有するが雑で，退化傾向がみられる。外底部には回転糸切り痕を残す。施釉痕はわずかに確認できる。11世紀。

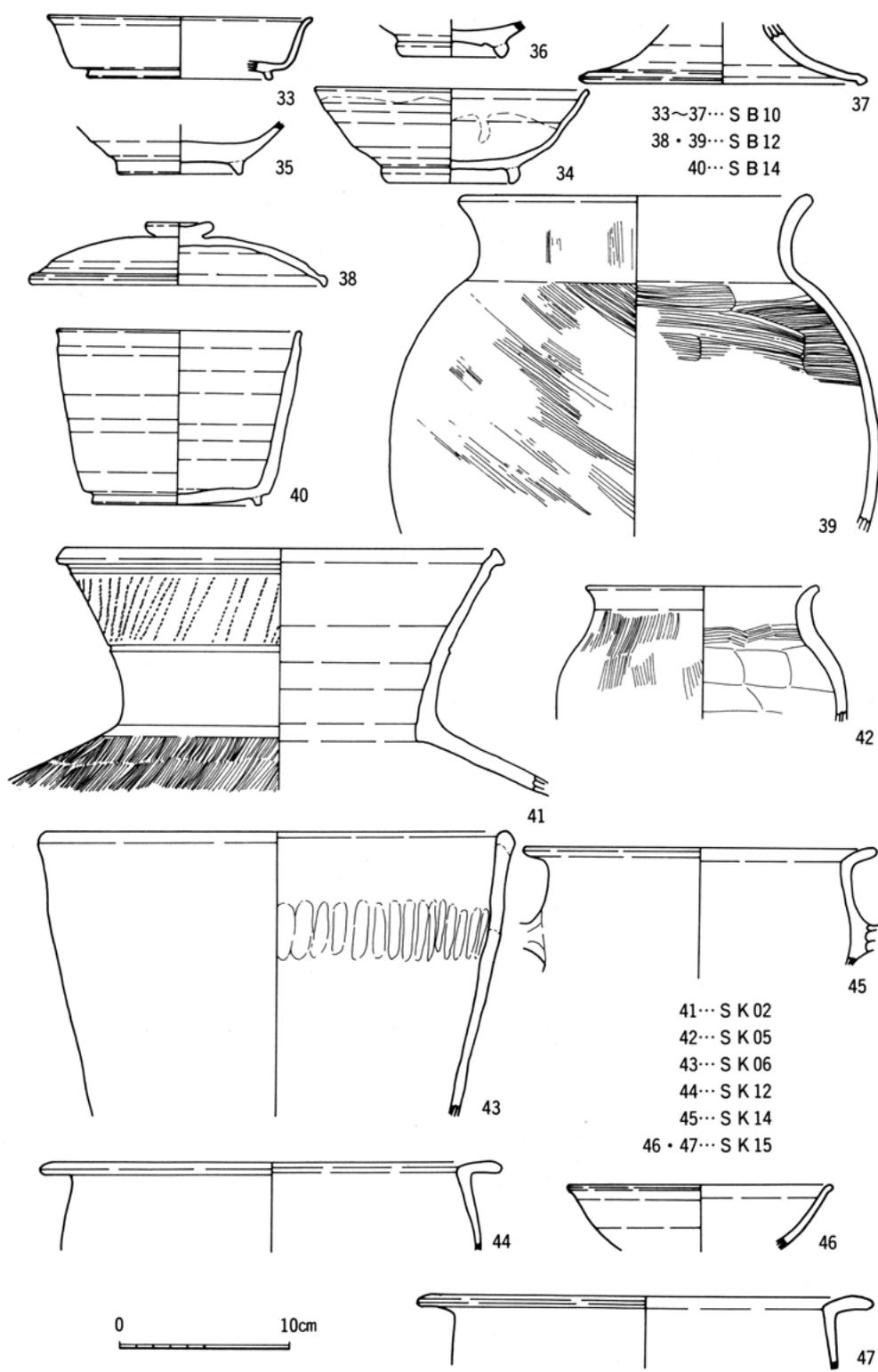
S K 26 63は緑釉陶器碗である。底部片で，淡灰色に焼け締まった硬陶。濃緑色の鉛釉が全面に見られる。外底部は回転ヘラ削り痕を残す。10世紀。

S K 27 64は須恵器蓋で，宝珠鈕を有し，天井部外面には回転ヘラ削り痕が見られるが，やや雑である。焼成時の焼けひずみがやや大きい。天井部内面にはヘラ記号「|」，磨滅痕が見られる。65は灰釉陶器短頸壺。肩部以下を欠くが，球形の体部に短く直立する口縁部を有する形状で，色調は灰白色を呈し，体部外面，口縁部内面には淡緑色の灰釉が見られる。66は土師器甕の底部で，丸底である。製作技法は表面が磨滅し明らかにはできない。二次的に被熱している。64は7世紀末～8世紀前半，65・66は時期は特定できない。

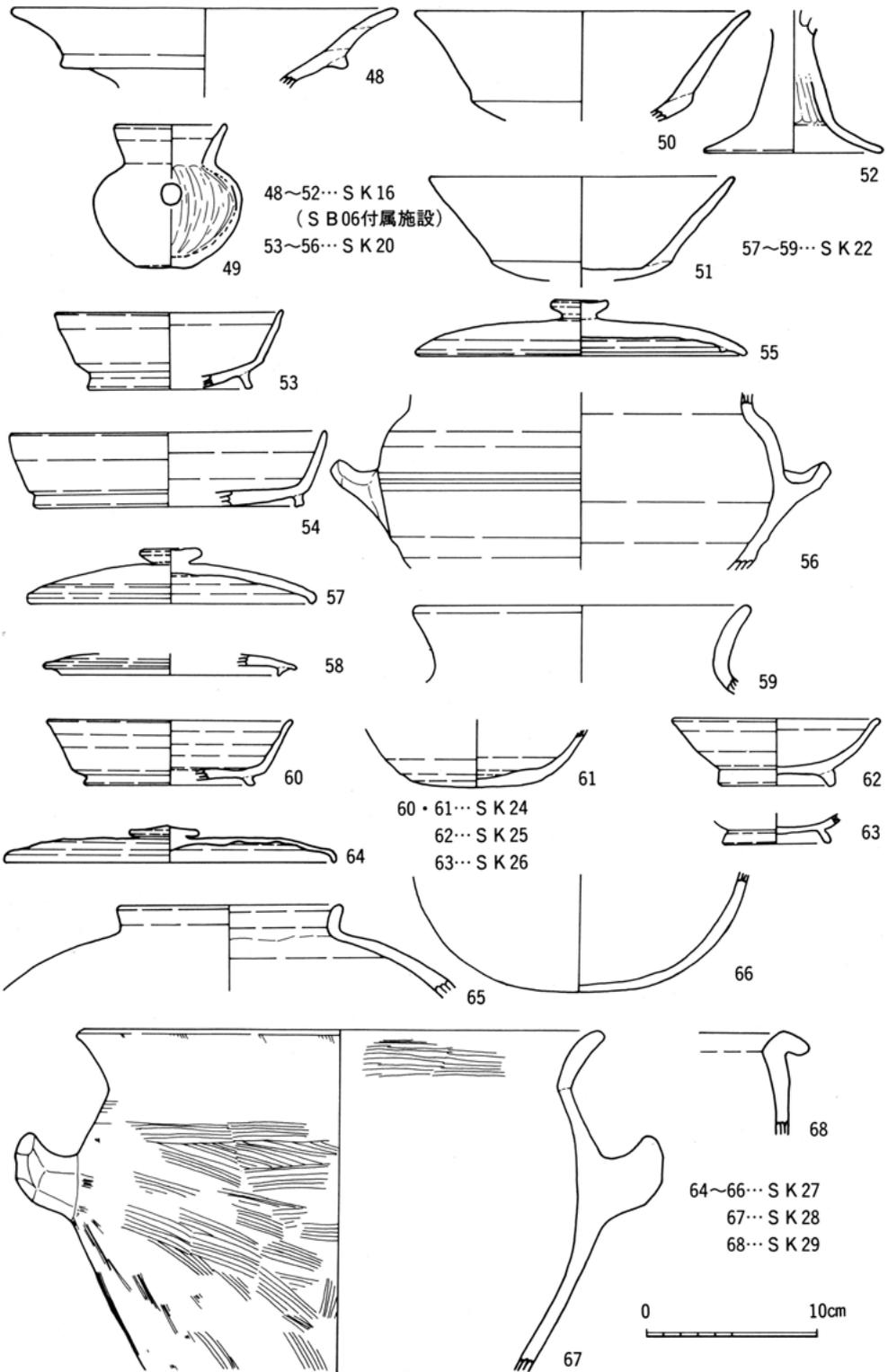
S K 28 67は土師器甕である。底部を欠くが，卵形の体部を有し，外反して口縁部に至る。把手は体部最大径付近に付く。体部外面・口縁内面にハケメ調整痕を確認できる。体部にはススが付着する。7世紀頃か。

S K 29 68は土師器甕で口縁部のみ残存する小片。器壁は厚く，太く短い口縁部が付く。11世紀。

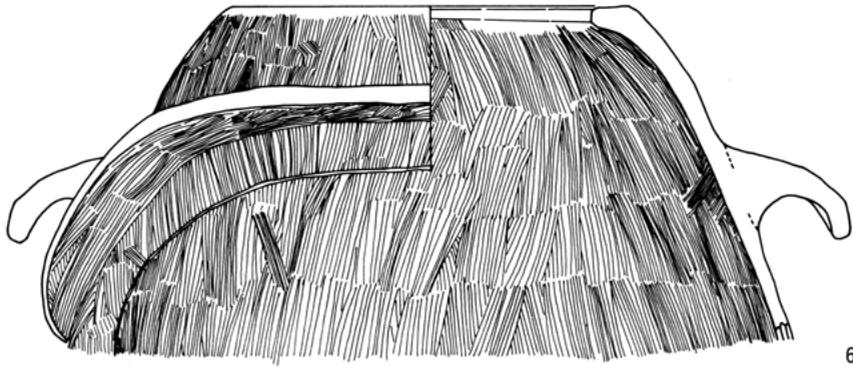
S K 30 69は土師器置カマドで，底部を欠くが，体部にハケメ調整痕を残す。形状は側面が台形で，底部より円形に切り込んだ焚口を有するもので，焚口の上部には粘土板による庇を付ける。焚口の側面には把手が付く。二次的な被熱・ススの付着はみられず，未使用



第10図 遺物実測図③

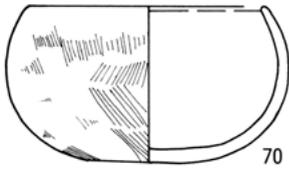


第11図 遺物実測図④



69

69... S K 30



70



71



73

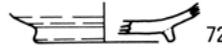
70... S K 33

71・72... S K 34

73... S K 35

74・75... S D 22

76... S D 28



72



76



74



75



77



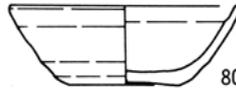
78



81



79



80



82



83



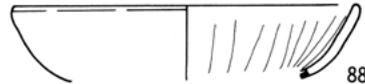
84



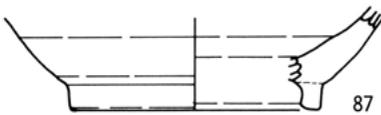
85



86



88



87

77~89...包含層



89



第12図 遺物実測図⑤

であった可能性もみられる。7世紀頃か。

S K 33 70は土師器鉢で、形状は長胴形を呈する土師器甕の底部に類似している。口縁部はやや内傾する。外面はハケメ調整痕が残る。時期は特定できない。

S K 34 71・72は灰釉陶器で、底部のみ残存し、全形は不明だが椀ないし皿になるものと推定できる。高台を有するが雑で、退化傾向がみられる。外底部には回転糸切り痕が確認できる。施釉は確認できない。71・72とも11世紀。

S K 35 73は灰釉陶器皿で底部を欠く。高台を有するがやや雑で、退化傾向がみられる。体部には施釉痕が認められる。口縁部直下の外面に墨書がみられるが判読はできない。11世紀。

S D 22 75は須恵器盤。無高台で、腰部で大きく屈曲した形状をとる。やや生焼けである。外底部には回転糸切り痕を残すが、外周10mm程度は回転ヘラ削りで消されている。76は須恵器盤で、宝珠鈕を持つ蓋を天地逆にし、高台を付けた形状をとる。やや生焼けである。外底部に回転ヘラ削り痕を確認できる。内面底部には磨滅がみられる。75・76ともに8世紀後半。

S D 28 74は須恵器杯。かえりを有する形状をとる。外底部にはヘラ切り痕を残す。

包含層 77～86まで須恵器。77～80は杯で、外底部の状況は77・78が回転ヘラ削り痕を、79・80は回転糸切り痕を残す。82～85は蓋で、81を除き全て宝珠鈕を有する。86は盤で内面に磨滅痕が著しく、転用硯の可能性も考えられる。87は灰釉陶器長頸瓶底部。88は土師器皿、赤褐色のやや砂粒を混入する胎土を用いている。表面が磨滅し、不明確ではあるが、わずかに外面にヘラ磨き痕、内面に放射状暗文を観察できる。89は土師器甕口縁部片である。

### ③鎌倉時代～室町時代

S D 01 90は壺ないし甕の底部片である。底部は平底で下胴部はやや外反ぎみに伸びる。非ロクロで外面には底部付近に横方向ヘラ削りの後、幅7mm程残して縦方向のヘラ削りを施している。ここには黄土ハケ塗り痕も観察できる。時期は特定できない。

S D 03 91は施釉陶器壺底部片で、外面に暗茶色鉄釉、内面に明緑色灰釉を施す。外底部には回転糸切り痕を確認できる。16世紀。92は皿底部片で、全面に濃緑色灰釉を施す。16世紀前半頃。93は土師器で釜C（4章(2)参照）、口縁を1/8残す小片である。なおS D 03にはこれら以外に16世紀に属する施釉陶器小片捏鉢片がみられる他、土師器として鍋A（A-1類）・B・釜A・Cの小片がみられる。

S D 04 出土遺物はみられなかった。

S D 05 94は捏鉢で口縁を1/6残す小片である。全体としてやや浅めの形状で、口縁部は

「受け口」状を呈する。体部外面にヘラ削り痕がみられる。胎土は密であるが、直径1～4mm大の長石・石英粒を多く含み全体として粗雑な印象を受ける。15世紀前半。なお、SD05にはこれら以外に16世紀代に含まれるものも散見できる。

SD07 95は青磁碗で底部片である。低く幅の広い高台を有する。体部内外面に淡緑茶色釉を施す。14世紀。96は播鉢で底部片。軟質で全面に赤胴色の鉄釉を施す。外底部には回転糸切り痕を確認できる。16世紀前半。97は施釉陶器皿で、黄緑色の灰釉を施す。16世紀の中頃。なおSD07にはこれら以外で、15世紀末～16世紀初期の播鉢や16世紀に属する甕口縁部片などがみられる他、土師器として鍋B・釜Aがみられる。

SD08 98は山茶碗底部片である。無高台で外底部に回転糸切り痕を確認できる。生焼けである。13世紀末。99は施釉陶器壺で、短く外反する口縁部を有する。全面に茶褐色の鉄釉を施す。15世紀。なおSD08にはこれらの他、小片で15世紀代に含まれると考えられる播鉢がみられる。

SD09 100・101は施釉陶器皿で、白色ないし淡黄色の長石釉を全面に施す。16世紀末～17世紀初頭。102も施釉陶器皿で、底部片ではあるが内底部を除く全面に施釉された痕跡がみられる。16世紀後半。なお、SD09にはこれら以外に、小片で16世紀に含まれる播鉢などがみられる他、土師器として鍋Bがみられる。

SD10 103は土師器で鍋A（A-1類）の口縁部片、なおSD10にはこれら以外に、16世紀代に含まれると考えられる播鉢片が数点みられる他、土師器として釜Aがみられる。

SD11 出土遺物はみられなかった。

SD14 104は土師器で鍋Eの口縁部片。

SD17 105は土師器で釜B。表面は磨滅している。

SD18 出土遺物は乏しい。図示し得るものはみられないが、土師器釜B・皿Aが若干出土している。

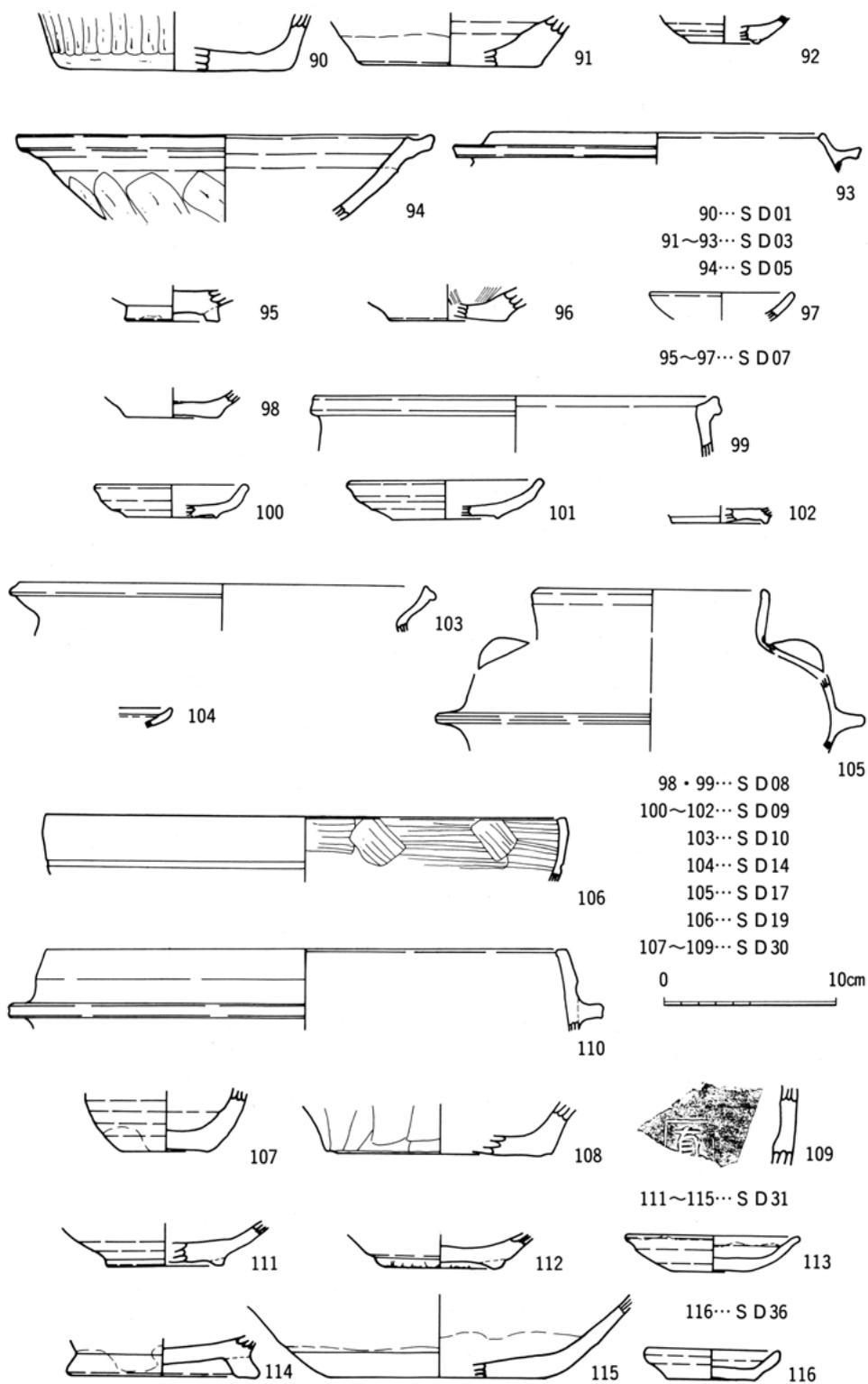
SD19 106は土師器で鍋Bの口縁部片。

SD30 107は施釉陶器壺底部片で、内外面に黒鉄色（または暗茶色）の鉄釉を施す。外底部には回転糸切り痕を残す。15世紀か。108は無釉陶甕で底部のみ残存する。13世紀末～14世紀前半。109は壺胴部片で外面に文字印を押す。時期は特定できず、奈良時代～平安時代に属する可能性すら考えられる。110は土師器で釜A。なおSD30にはこれらの他、土師器で鍋A（A-2類）がみられる。

SD25 出土遺物はみられなかった。

SD27 出土遺物はみられなかった。

SD31 111・112は山茶碗底部片である。高台を有し、外底部には回転糸切り痕を残す。



第13図 遺物実測図⑥

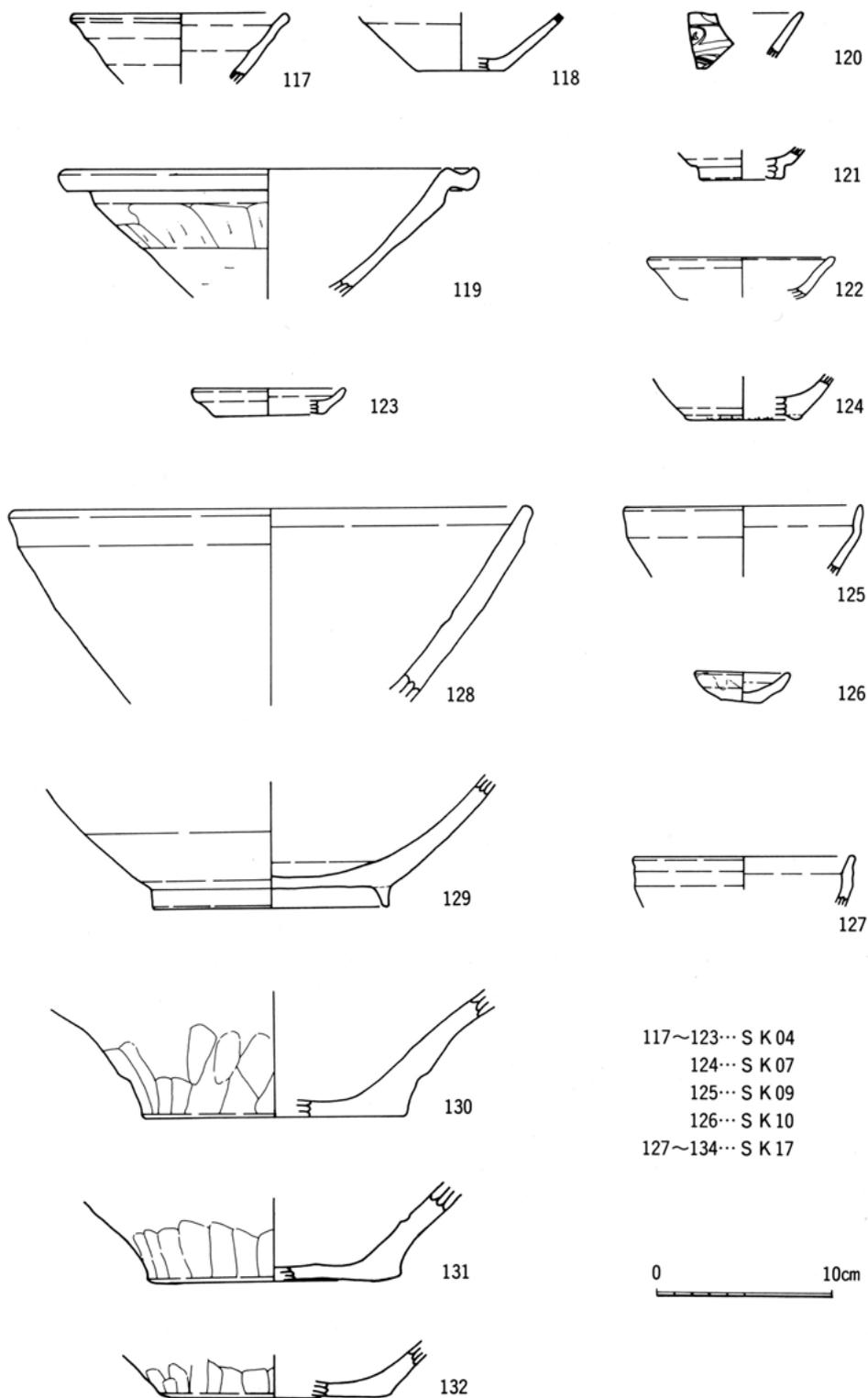


图14图 遗物实测图⑦

112は高台端部にモミ痕が残る。11・112とも12世紀末～13世紀初頭。113は施釉陶器縁釉皿で暗茶色(または黒鉄色)の鉄釉を口縁部付近に施し、外底部には回転糸切り痕を残す。15世紀中頃。114は施釉陶器壺底部で高台を有する。外面には黄緑色の灰釉を施す。14世紀末～15世紀。115は施釉陶器折縁深皿で淡緑色の灰釉を体部上半まで漬け掛けし、内底部にはハケ塗りする。外底部・下胴部は回転ヘラ削り痕を残す。14世紀末。なおS D31にはこれら以外に、15世紀代に含まれる施釉陶器片数点の他、土師器で鍋Bがみられる。

S D32 出土遺物は乏しい。図示し得るものはみられないが、13世紀末～14世紀頃の山茶碗体部小片がみられる。

S D34 出土遺物は乏しい。図示し得るものはみられないが、15世紀末頃の施釉陶器片が若干みられる他、土師器鍋A-2類の小片も含まれる。

S D35 出土遺物中には図示し得るものはみられないが、16世紀頃の施釉陶器片がみられる。

S D36 116は山茶碗小皿である。無高台で外底部に回転糸切り痕を残す。13世紀。

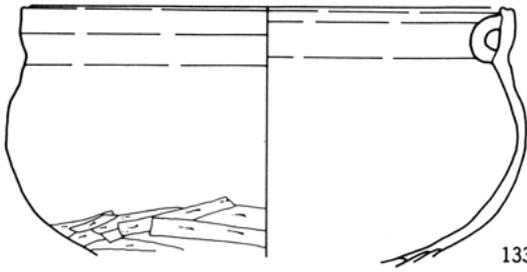
S K04 117・118は山茶碗である。ともに残い形状で、117は口縁部片、118は底部片である。118は無高台で外底部には回転糸切り痕を残す。117・118とも14世紀。119は捏鉢である。全体としてやや浅めの形状で、口縁部は「受け口」状を呈する。体部外面に静止ヘラ削り痕が下方は横方向、上方は斜め方向に見られる。胎土は密であるが、直径1～10mm大の長石・石英粒を多く含み全体として粗雑な印象を受ける。15世紀前半。120は青磁碗で、口縁部小片。内面に牡丹文系の陰刻がみられる。13世紀。121は施釉陶器天目茶碗で、底部片である。高台は「内反り」で削り出しにより調整される。内面に淡茶色の鉄釉が見られるが、体部外面下方は露胎である。15世紀中頃。122・123は土師器で122が皿B類、123が皿A類。123の外底部は磨滅し不明確ではあるが回転糸切り痕を確認できる。なお、S K04ではこれらの他に土師器鍋E・釜Cの破片が十数点出土している。

S K07 124は山茶碗底部片である。高台を有し、先端部にはモミ痕が若干残る。13世紀中頃～後半。

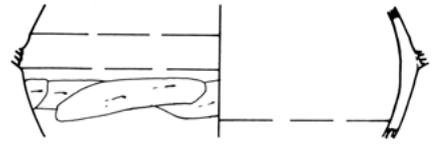
S K09 125は施釉陶器天目茶碗である。下胴部以下を欠くが、体部は口縁直下で内側に屈曲しゆるい稜を持って外反せずに口縁部に至る。全面に暗銅色の鉄釉を施す。15世紀前半。

S K10 126は施釉陶器小杯。丸味を帯びた浅めの形状で完形である。口縁部外面・体部内面に黒鉄色(または暗茶色)の鉄釉を施す。外底部には回転糸切り痕を残し、「墨書」の可能性もある。15世紀前半。

S K17 127は施釉陶器天目茶碗である。下胴部以下を欠くが、体部は口縁直下で内側に屈曲する形状で、口端部は短かく外反する。全面に暗茶色(または黒鉄色)の鉄釉を施す。



133



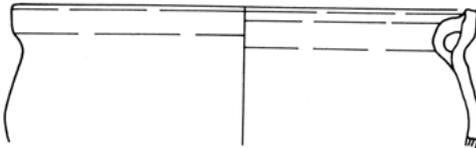
135

127~135... S K 17

136... S K 18

137~139... S K 19

140~145... S K 31



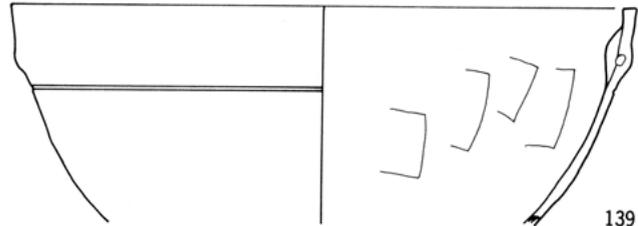
134



136



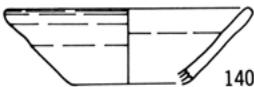
137



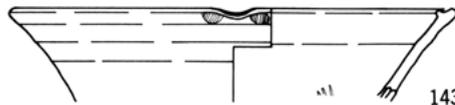
139



138



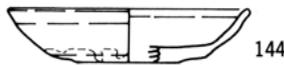
140



143



141



144



145



142

第15図 遺物実測図⑧

15世紀末。128～132は捏鉢で128を除き全て底部片である。129が高台を有するのみで他は無高台である。いずれも内面は磨滅が著しい。129が13世紀後半，128・130～132は14世紀前半。132～135は土師器で，133・134鍋A（A—2類），135が釜B。なお，SK17にはこれら以外に15世紀末に属する播鉢などがみられる。

SK18 136は播鉢で底部片である。外底部には回転糸切り痕を残す。硬質である。15世紀末。

SK19 137は施釉陶器緑釉皿で，濃緑色の灰釉を口縁部付近に施し，外底部には回転糸切り痕を残す。15世紀中頃。138は施釉陶器でいわゆる尊式花瓶の底部片。黄緑色の灰釉が体部にみられる。外底部には回転糸切り痕を確認できる。15世紀前半。139は土師器で鍋B。

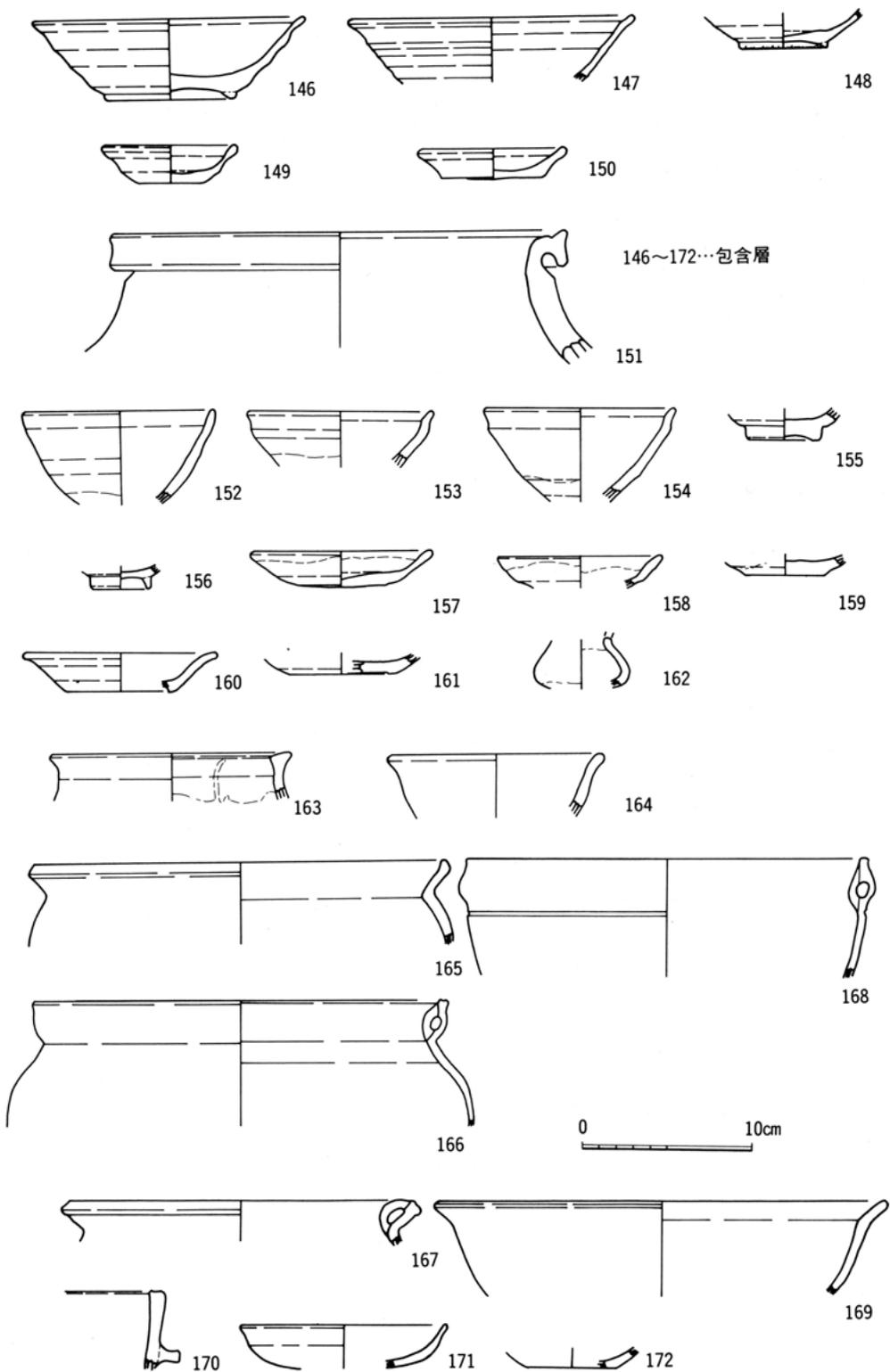
SK31 140～142は山茶碗で，140は浅めの形状で141・142は高台を有し，先端部にはモミ痕がみられる。なお145には内底部に焼成時，他の高台が粘着している。140は14世紀末。141・142は13世紀中頃。143は播鉢。口縁部片で硬質である。15世紀前半。144は施釉陶器皿で，濃緑色の灰釉を体部までツケ掛けし，内底部には薄くハケ塗りを施す。外底部には回転糸切り痕を確認できる。14世紀末。145は土師器釜C。なおSK31にはこれら以外に，14世紀末の施釉陶器平碗の他，土師器皿A類の底部片がみられる。

包含層 146～148まで山茶碗。148はいわゆる北部系山茶碗で薄手である。149・150は山茶碗小皿である。151は甕，152～155は施釉陶器天目茶碗で152・155が鉄釉，153・154が灰釉を施す。156は施釉陶器碗，157～159は施釉陶器緑釉皿で口縁部付近に157・158は灰釉，159は鉄釉を施す。160・161は施釉陶器稜皿でいわゆるゴケ底を呈する。160が鉄釉，161が灰釉である。162は施釉陶器茶入れ，鉄釉を施す。口縁部は欠失後研磨し再利用している。163は施釉陶器壺。鉄釉を施す。164は青磁碗である。165～172は土師器で，165～168が鍋A，168が鍋B，169が鍋D，170が釜Aである。171・172は皿で171がB類，172がA類。

## (2) 金属製品

金属製品は数量的に乏しい。種類としては鉄製品（173～177）と銅製品（178～183）がある。

173は刀子で中間部を欠失し，全長は明らかにできない。SB04支柱穴より出土。174は釘。34mmのみ残存する。錆がひどく断面の形状は不明確だが，当初は方形を呈していたと推定される。175は用途不明品。長辺49mm，短辺23mmの小札状を呈し，上方には直径6mmの寧穴も見られる。176も用途は不明で，1辺7mmの針金状の原材を丸く曲げて成形している。177はL字状を呈する鉄板で，残存長54mm。やはり用途不明である。178は厚さ1mmの薄板



第16図 遺物実測図⑨

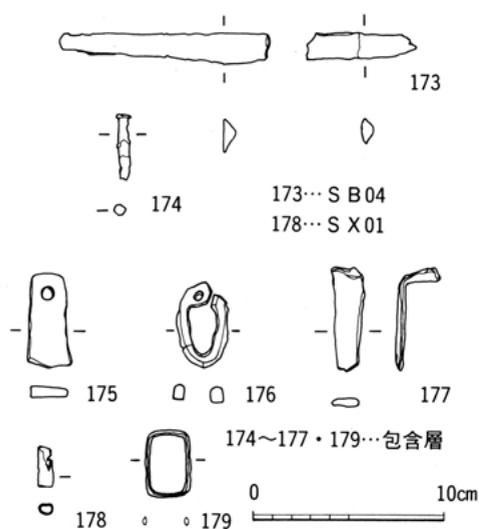
を直径8mmの円筒状に丸めたような形状。残存長21mm。S X01出土。用途は不明である。179は長方形の金具で、断面は半円形を呈する。長辺35mm、短辺25mmで用途は不明。180～183は銭貨。今回の調査では6点検出されたが、銭種の判明するものは右に提示する4点のみである。全て中国銭で、180が大観通宝、181が元豊通宝、182が天聖元宝、183が皇床通宝である。180・181のみS K04出土。

### (3) 石製品

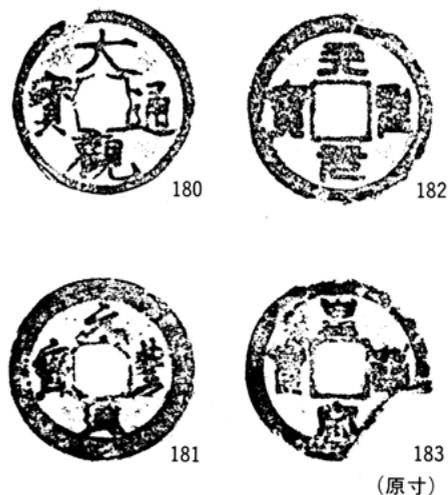
石製品には硯と砥石がある。

硯は3点検出された。いずれも破片資料で全形を窺い得るものではないが、形状は184・185が長方形、186が円形か。いずれも上面は使用痕が著しく、184・185などは裏面寸前まで磨滅する。石材は184が泥岩、185が粘板岩、186が頁岩である。時期は全て15～16世紀頃。

砥石は2点検出された。いずれも直方体を呈するが、使用により大きく磨滅する。石材は187が半花崗岩、188が泥岩である。187は包含層中、188はS D19より出土。



第17図 遺物実測図⑩

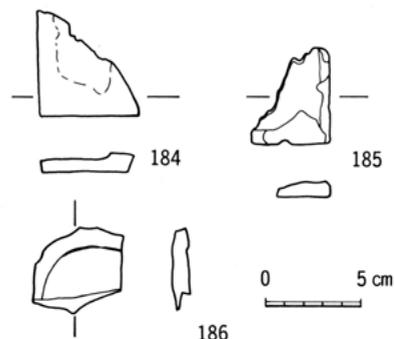


第18図 銅銭拓影

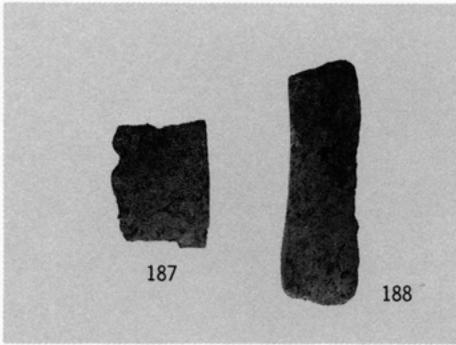
### (4) その他の遺物

#### ① 弥生時代中期以前の土器

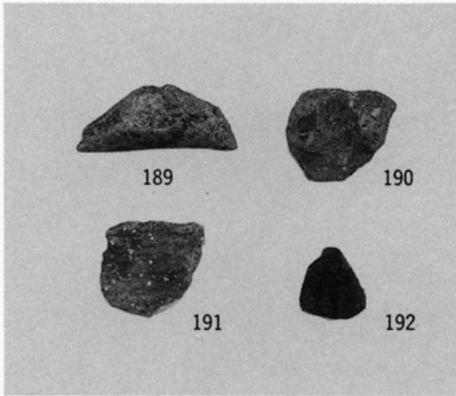
189～191は縄文土器。189は深鉢の装飾部分で指ナデによる渦巻き文様を施す。縄文後期。190・191は条痕文系土器で、口縁部片である。190は広く薄い突帯を指ナデで刻む。口端部は横ナデを施す。191は、口縁部を指頭で刻む。



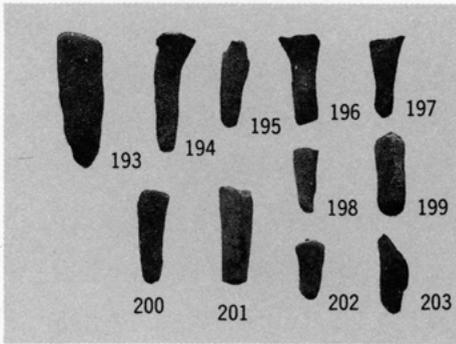
第19図 遺物実測図⑪



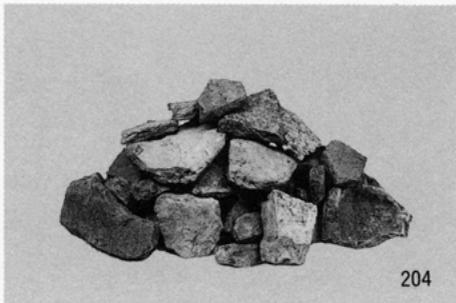
第20図 砥 石



第21図 弥生時代中期以前の土器



第22図 製 塩 土 器



第23図 瓦

縄文晩期末葉。192は黒耀石。

### ②製塩土器

193~203。全て製塩土器の脚部片である。

8世紀前後。

### ③瓦

約60点みられるが遺構に伴う資料ではない。全て、平瓦・丸瓦の破片のみである。使用胎土は密で、2~5mm大の砂粒を含む。焼成は灰褐色に硬く焼け締まったものも数点含まれるが、多くは淡赤褐色で生焼けぎみである。なお後者には2~4mm大の赤褐色粒子を観察できる場合もある。表面は全体に磨滅が著しいが、凹面には布圧痕、凸面にはナデ痕、削り痕（まれにナワタタキ痕）などが観察できる。平瓦についてはこれらの他に凹面について模骨痕が見られるものや、糸切り痕が見られるものも含まれる。

### ④貝類

SD01・SK04埋土中に確認された小規模な貝層中に見られたもので、残存状況はよくない。SD01・SK04ともにハイガイ・マガキ・アサリを主としているようだが、オキシジミ、シオフキ、ウミナなども若干みられた。

## 4 章 考 察

### (1) 遺構の時期別変遷

本項では今回検出された遺構について整理し、時期別の変遷についてまとめる。

加美遺跡の遺構は前述したように①弥生時代中期、②古墳時代～平安時代、③室町時代～安土桃山時代と区分できる。検出できた遺構の相様は以下に述べるように①～③についてそれぞれ大きく様相を異にしている。従って、それぞれをⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼称する。

以下、これらを基準とし、注目される事項等を、それぞれ時期別にたどる。

#### Ⅰ期

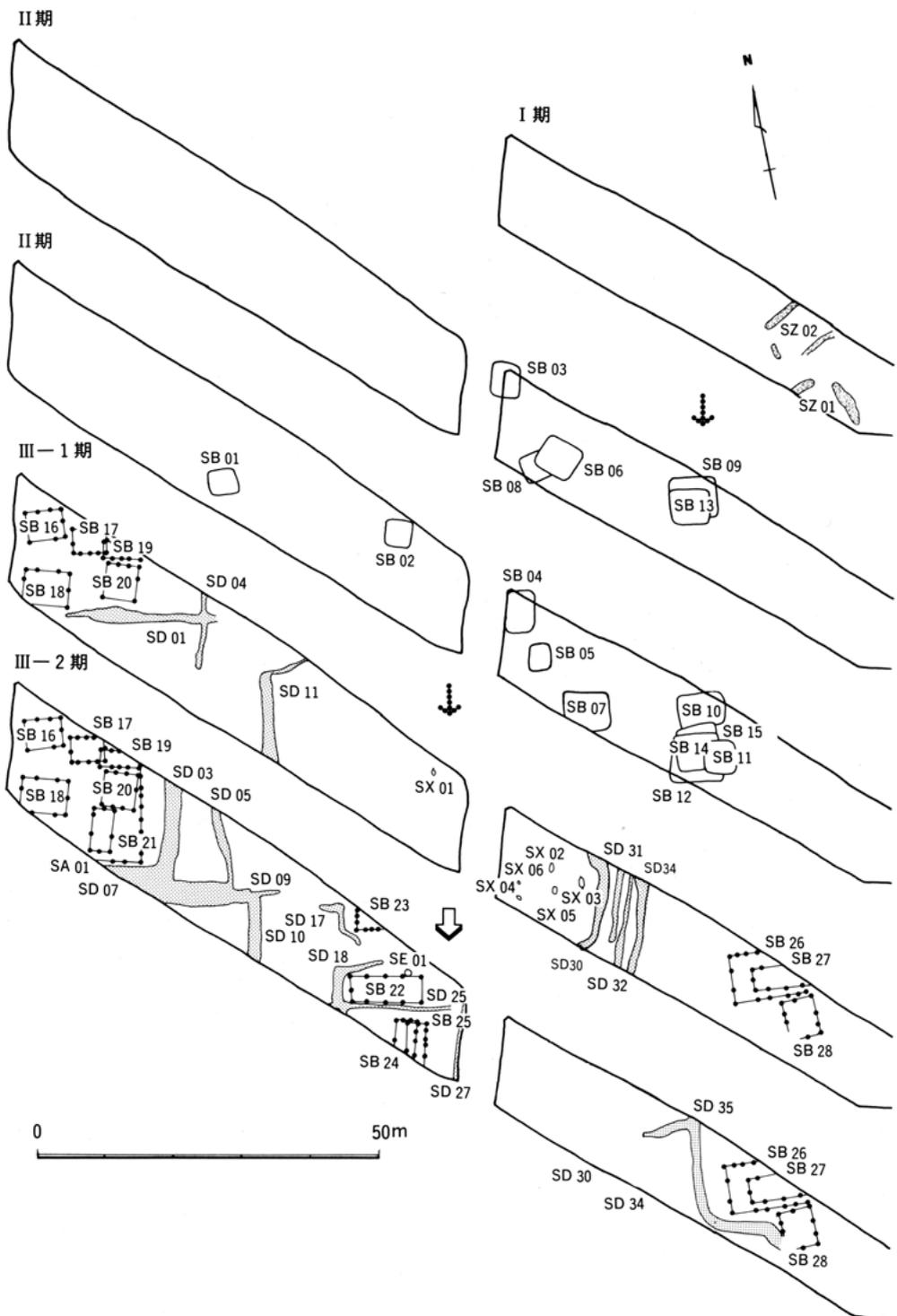
調査区の東縁部に方形周溝墓が掘削される。いずれも調査区内で全形を確認し得ず、規模等不明確な点が多い。なお、所属する集落の存在は知られておらず、付近に未知の弥生集落が存在する可能性は高い。

#### Ⅱ期

調査区の東側を中心に竪穴住居により構成される集落が形成される。検出したのは15軒と多くはない。また、Ⅱ期が古墳時代～平安時代という長期に渡っており、これらは継続的に形成された可能性は低く、むしろ断続的に営まれたものと理解したい。遺構の分布状況には著しい濃淡が認められ、特にA区に集中する傾向をみせる。なお、第24図はⅡ期遺構を奈良時代を境にさらに二分して掲載しているが、これは繁雑さを避ける理由からで、特に歴史的な意味はない。また、掘立柱建物は未検出で、未調査部分に存在する可能性は残されるものの、結果的に竪穴住居優位の構成比を有することは否定できない。なお、この状況を加美遺跡Ⅱ期と立地条件、時期幅などがほぼ一致する西尾市志貴野遺跡でみると、奈良時代末ないし平安時代初頭に従来の竪穴住居で構成される集落から掘立柱建物を主体にするものへと変化していることが確認されている。こうした差は集落の有する性格の差異として考えられるのかもしれない。

#### Ⅲ期

遺構は調査区全域で確認できる。全面に溝による区画が設定され、掘立柱建物の「屋敷地」や「火葬施設群」がみられる。Ⅲ期は溝の切り合い関係から、さらにⅢ－1期・Ⅲ－2期に細分でき、伴出する遺物から前者は15世紀代、後者は15世紀末～16世紀中頃と年代を付与できる。なお、掘立柱建物については情報量に乏しく、第24図に示すように具体的な変遷は、溝などと明らかに切り合うものだけを時期差と認め得たのみに留まった。



第24図 遺構の時期別変遷

## (2) 中世土器について

### ①

前章で述べたように、加美遺跡では主に中世後半期に属する資料の出土をみることであったわけだが、当地域ではこの時代の土器研究は、主に生産地出土資料を中心に進められつつあることは周知の如くである<sup>①</sup>。しかし近年集落遺跡の調査が進むにつれ土師器の存在が明確化し、消費地での土器組成が陶磁器のみで構成されるものでないこと、土師器も一定比率を持ってその構成因子に加わることなどが明らかにされつつある。従来当地域においてこの時代の土師器を扱ったものとして、北村和宏氏による杉山遺跡の分析<sup>②</sup>、佐藤公保氏による尾張地方の分析<sup>③</sup>などがみられるが、いずれも西三河地方においては資料的制約から十分論及されてはいない。従って本項では、現状ではいささか資料不足気味とは考えられるが、尾張地方と東三河の中間地帯として西三河地方における中世後半期の土師器を加美遺跡資料を中心に整理する。

### ②

加美遺跡出土資料は器種としては、鍋・釜・皿がみられる。具体的分類法は、鍋・釜については鏝の有無に注目し、鏝を有するものを釜、持たないものを鍋とした<sup>④</sup>。これらは基本的に丸底で左右対象に「吊り手」を二ヶ所有し、外面にはススの付着がみられ煮沸具として用いられたことが考えられる。形状により鍋を4類（A～D）、釜を2類（A・B）に分類する。

鍋A：扁平な球形を呈する体部に短い口縁部を有するもので、口縁部内側に「吊り手」がみられる。口縁部は外反するものやほぼ直立するものがみられ、さらにこれらの中間的な形状をとるものもみられる。

鍋B：半球形の体部を有し、口縁部内側に「吊り手」がみられる。口縁端部はフラットである。

鍋C：やや扁平な球形を呈する体部に短く直立する口縁部を有する。肩部外側に板状の「吊り手」がみられる。加美遺跡では確認されていない。

鍋D：深鉢状を呈する体部に強く外反する口縁部を有する。口縁部片1点を検出したに留まり、全形は不明であるが口縁部内側に「吊り手」を持つと思われる<sup>⑤</sup>。

釜A：大形で形状は鍋Bに似るが、口縁部付近に鏝を有する。

釜B：やや扁平な球形を呈する体部に短く直立する口縁部を有する肩部外側に環状の「吊り手」を有する。胴部には鏝がみられる。

次に皿についてだが、一応ロクロ成形のものをA、非ロクロ成形のものをBとする。ただし資料が乏しく、安定したものは後述する西尾城S D01例に留まるため、今回詳細はは

ぶきたい。従って以下には煮沸土器を中心にして記述する。

③

以上、加美遺跡資料の分類を試みたが、これが西三河地方についてもあてはまるかどうか、他遺跡資料を用い検証する。なお、これらは資料的限界が大きいものが大半だが、大枠を理解する上では障害にはならない程度の量に達していると考えられる。

西尾城（西尾市）<sup>⑥</sup>

西尾城は洪積台地縁端部に所在する。今回呈示する資料は西尾小学校グラウンド整備に伴う調査により出土したものである。③を除き調査時に検出された方形館を巡る溝中より出土したものの一部で、内分けは、鍋Aが4点、鍋Bが1点、釜A・Bが各1点、皿Aが4点、皿Bが3点である。伴出資料として播鉢・山茶碗を図示した。資料は西尾市資料館に保管されている。

熊子第2号遺跡（西尾市）<sup>⑦</sup>

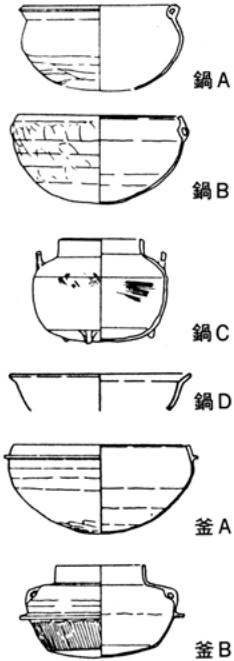
熊子第2号遺跡は洪積台地縁端部に所在する。今回呈示する資料は県道蒲郡、碧南線工事に伴う調査により採集されたものである。②を除き、PⅦ土坑と呼称されている井戸出土資料の一部である。この井戸は廃絶に伴い破棄土坑化したようで、埋土中からは大量の土器・陶器類の他、貝殻が厚く堆積していた。内分けは、鍋A・B・Dが各1点、釜Aが2点、釜Bと皿Aが各1点である。伴出資料として、皿・天目茶碗を図示した。資料は西尾市資料館に保管されている。

室遺跡（西尾市）<sup>⑧</sup>

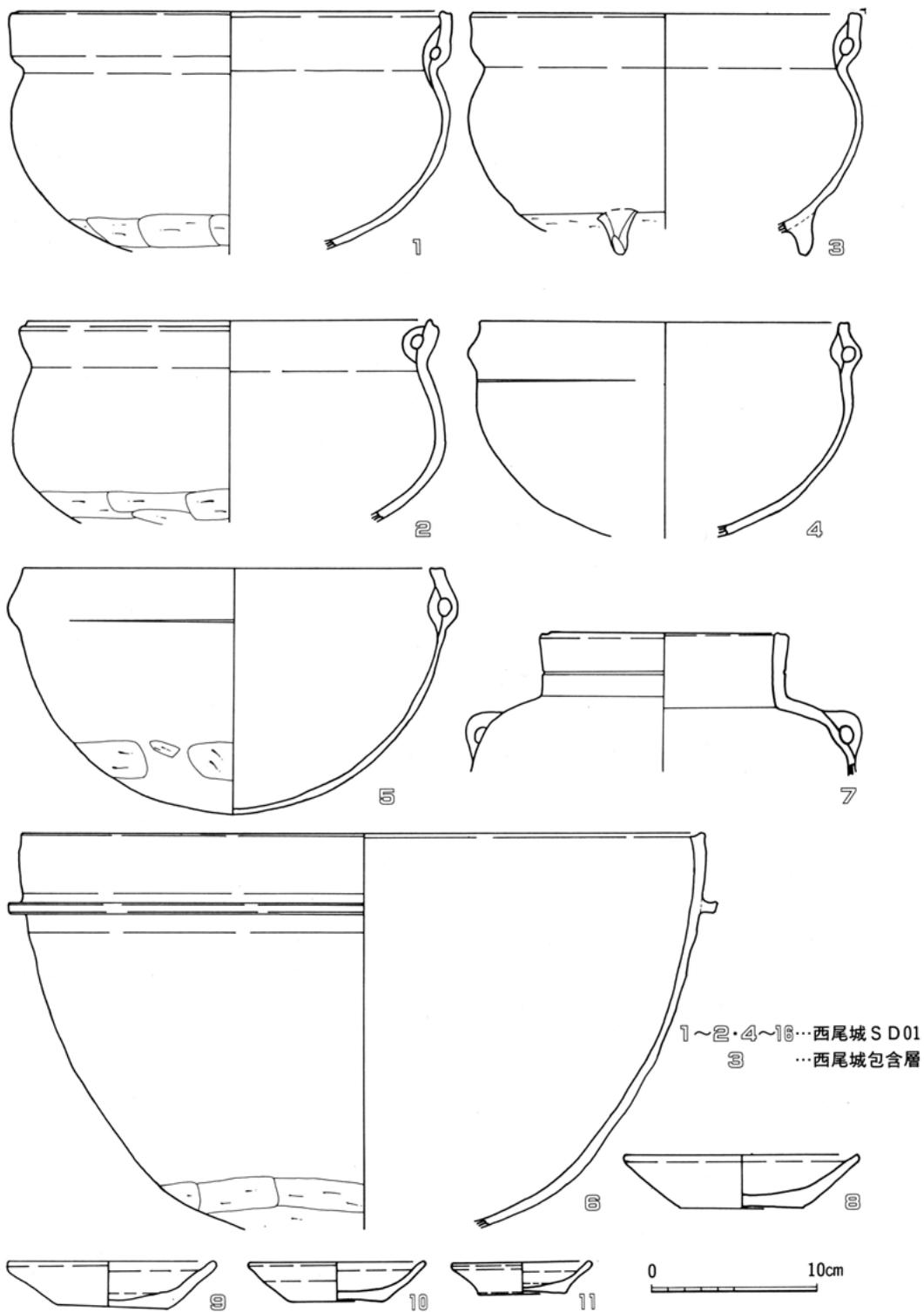
室遺跡は幸田川左岸の微高地に所在する12～15世紀の遺跡で、近接して吉良氏の家臣富永氏の居城『室城』が所在し、遺跡はこれと関連付けて理解されている。今回呈示する資料は国道23号線バイパス予定用地内における埋蔵文化財範囲確認調査により採集されたものである。内分けは、鍋Aと釜Aが各1点、鍋Bと皿Aが各2点である。伴出資料として図示した⑩は、⑪と「合わせ口」状に密着して出土している。

矢作川河床遺跡 渡地点（岡崎市）<sup>⑨</sup>

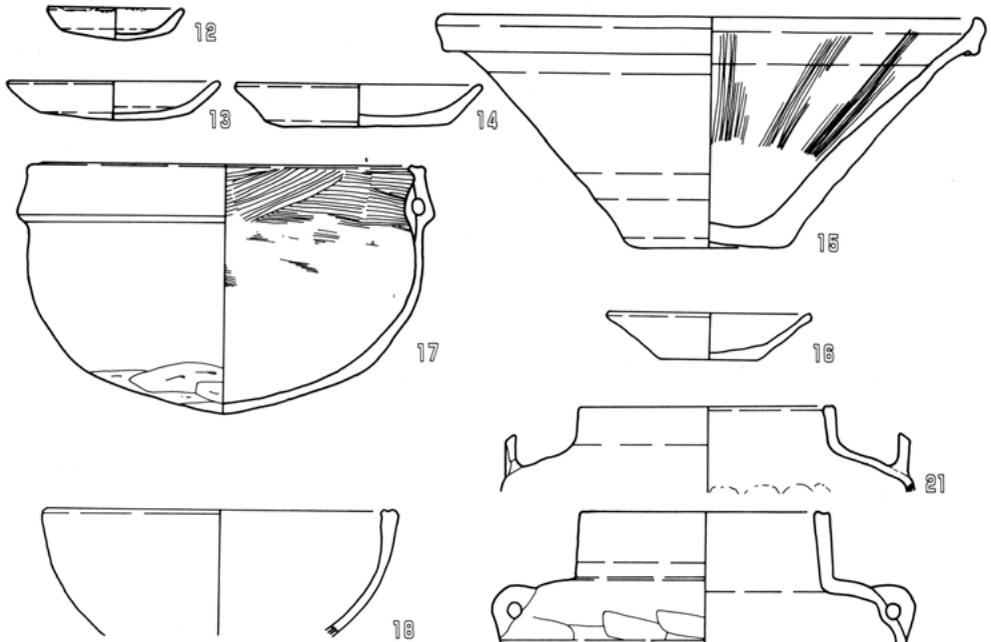
矢作川河床遺跡は、矢作川河川内において数地点知られる遺物散布地点の総称であるが、これらは全て縄文時代～現代に至る多量の遺物が川原に散布している状況を呈している。今回呈示する資料は、「渡地点」と呼称される場所で表面採集されたものである。内分けは鍋Aが2点・釜Bが1点である。資料は岡崎市郷土館に保管されている。



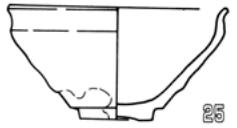
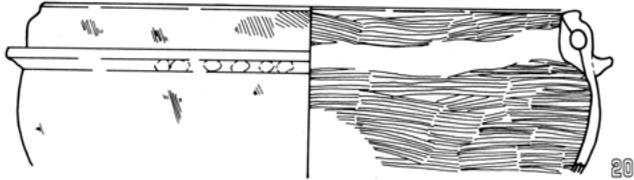
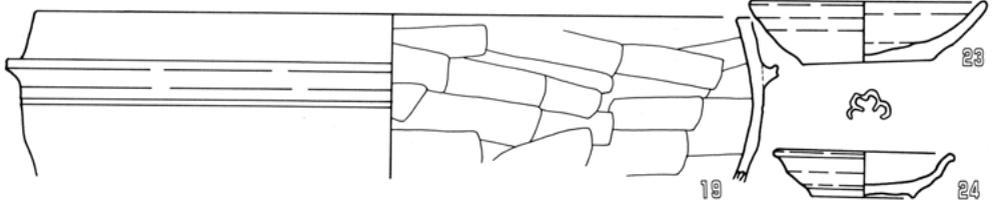
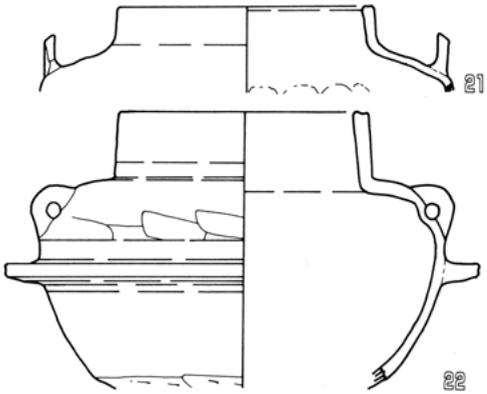
第25図 中世土器の分類



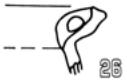
第26図 比較資料実測図①



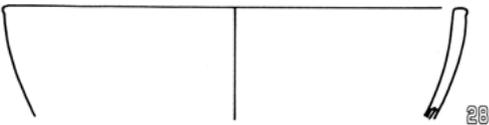
17~20・22~25 能子第2遺跡P VII土坑  
21 能子第2遺跡包含層



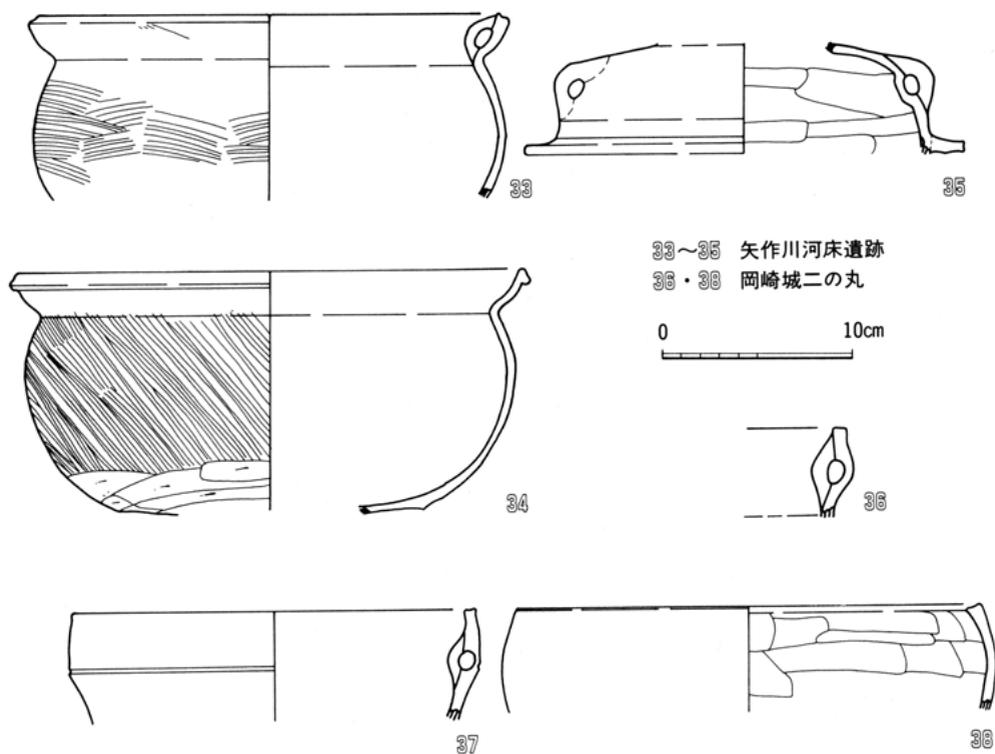
0 10cm



26~32…室遺跡



第27図 比較資料実測図②



第28図 比較資料実測図③

番号	名称	口径	底径	器高	備考	番号	名称	口径	底径	器高	備考	
1	鍋	A	25.5	—	(14.3)	20	釜	A	13.4	—	( )	
2	鍋	A	24.3	—	(12.2)	21	鍋	C	12.2	—	(14.6)	
3	鍋	A	23.5	—	14.6	22	釜	B	12.1	—	14.6	
4	鍋	A	22.3	—	(13.0)	23	皿	A	12.5	6.6	3.3	
5	鍋	B	32.6	—	16.8	24	皿		9.0	5.2	2.3	
6	釜	A	13.7	—	8.5	25	天目茶碗	11.4	3.8	5.9		
7	釜	B	41.2	—	(24.0)	26	鍋	A	—	—	—	
8	皿	A	14.0	7.4	3.2	27	鍋	B	—	—	—	
9	皿	A	12.3	6.5	2.8	28	鍋	B	23.7	—	5.8	
10	皿	A	10.4	5.4	2.3	29	釜	A	—	—	—	
11	皿	A	8.2	5.2	1.9	30	皿	A	6.7	4.0	1.7	口縁部 スス付着
12	皿	B	7.0	5.9	1.6	31	皿	A	11.6	5.4	3.3	
13	皿	B	10.7	7.9	2.1	32	卸	皿	12.5	6.2	3.2	
14	皿	B	12.7	8.7	2.2	33	鍋	A	24.2	—	(9.8)	
15	播鉢	鉢	27.9	7.0	12.1	34	鍋	A	26.5	—	(12.6)	
16	山茶椀		10.5	5.2	2.7	35	釜	B	—	—	—	
17	鍋	A	19.4	—	13.1	36	鍋	A	—	—	—	
18	鍋	B	28.0	—	(8.5)	37	鍋	A	20.9	—	(5.8)	
19	釜	A	37.6	—	(8.7)	38	鍋	B	24.2	—	(5.4)	

表1 比較資料法量表

## 岡崎城（岡崎市）<sup>⑩</sup>

岡崎城は乙川右岸の段丘縁端に所在する。今回呈示する資料は、二の丸跡と推定される地点で、「三河武士のやかた家康館」建設に伴う事前調査により採集されたものである。調査成果は江戸時代の遺構・遺物が中心で、中世後半に属すると考えられる資料は乏しく、包含層中より検出された3点が報告されるにすぎない。内分けは鍋Aが2点、鍋Bが1点である。資料は岡崎市郷土館に保管されている。

### ④

以上みて来たように、現状で明らかにされている断片的資料をみる限りは、西三河地方の中世後半期の土師器は、加美遺跡資料の内容をそのまま援用しても大きな矛盾は生じないと思われる。

なお、第30図に示した二例はいずれもⅢ-1期で若干みられたが、これらは主に中世前半期に主体をなした器形である<sup>⑪</sup>。比較資料にみられるように、これらのⅢ-1期でのあり方が不明確ではあるが、中世後半期にもある時期まで残存すると思われる。一応鍋E・釜Cとする。前者は扁平な球形を呈する体部に短く外反する口縁部を有するもので、口縁部は内側に折り返されている。「吊り手」は持たない。後者は釜Aに類似するが、体部は丸味を帯び、小型である。外面はハケメ調整痕を残す。

上記のように、西三河地方の中世煮沸土器は鍋E・釜Cについてはなお不明の点が多いが、大局的には加美遺跡他で確認できる6類にこれを加えた8類の組み合わせで構成されていると思われる。

次に前記した鍋Aについてだが、これは従来、主として東三河<sup>⑫</sup>ないし遠江地方<sup>⑬</sup>に存在が報告されていたが、西三河地方の各事例を見ると、この地方においても中世後半期を代表する器形として展開していくものと思われる。

### ⑤

この鍋Aは特に口縁部の形状に注目するとさらに4つに細分することができる。

A-1類：口縁部は内湾気味に外反する。頸部はくびれ、胴部は丸味を帯び、器高の1/2程度で最大径をはかる外面にはハケメ調整痕がみられる。下胴部外面は横削りされる。矢作川河床遺跡渡地点例を代表とする。

A-2類：口縁部はやや外反する。頸部はややくびれるが、胴部の最大径はA-1類に比してやや上方にあり全体に扁平な半球形を呈する。全面横ナデ調整だが、下胴部外面は横削りされる。加美遺跡SK17を代表とする。

A-3類：口縁部はやや外反する。頸部は一周する指頭によると思われる横ナデで表現される。口端はフラットでやや肥厚する。胴部の最大径は頸部のやや下方に見られる。全

面横ナデ調整だが、下胴部外面は横削りされる。西尾城 S D01例を代表とする。

A-4類：口縁部はほぼ直立し口端はフラットである。全体に半球形を呈し、鍋Bに近い形状である。頸部と体部の境界は、内面は稜で、外面は沈線で表現される。この外面に見られる沈線は、A-3類の頸部に見られる指頭によると思われる横ナデと同様の性格を有すると思われる。外面は横ナデ調整だが、下胴部外面は横削りされる。内面はハケメ調整痕が頸部に顕著である。熊子第2遺跡P VII土坑例を代表する。

以上見たA-1～A-4類はそれぞれの代表例にみる伴出資料からこの順で変遷している可能性を考えることができる。ところで杉山遺跡では鍋Aを（杉山遺跡分類では土鍋C類）型式学的な差異や杉山遺跡内での遺構の検討から、口縁部が外反するものから、直立するものへ変遷することを想定している。杉山遺跡に見る鍋Aは外面にハケメ調整痕が見られるものも多く、西三河のものとは細部に至っては異なるが、大枠での一致は興味深い。



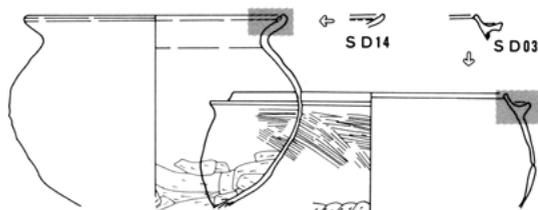
第29図 鍋Aの細分と伴出資料

⑥

共通の時間軸を設定するために、軟質で破損率が高かったと考えられる土師器煮沸具に主眼を向けた編年作業は、硬質の陶磁器類のそれに比して年代決定という意味においてはより有効となり得ると考えられる。従って最近進みつつある中世～近世期の遺跡を考える上で、共通の時間軸を設定する指標として煮沸具の編年作業が急務かと思われる。この場合、西三河地方では鍋Aの動向を理解することが最も有効となるであろう。

以上、加美遺跡で見られた中世煮沸具を中心に若干の整理を試みたが、今回はその資料的制約から編年を組むには至らなかった。今後の再検討が必要である。

- ① 井上喜久男「美濃窯の研究(一) 一十五・十六世紀の陶器生産」『東洋陶磁 VOL 15・16』1988
- 藤沢良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」
- 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』



第30図 鍋E・釜C

V] 1986・「古瀬戸」概説』『美濃陶磁歴史館報』1984

- ② 『杉山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1988
- ③ 佐藤公保「尾張の土師器煮沸具」『マージナル9』愛知県考古学談話会1988
- ④ 注②の分類に従った。
- ⑤ 鍋Dは加美遺跡例以外西三河地方では管見にはふれなかったが、足立氏の言う主に信濃～関東にかけて分布する、桶型ないし外反型内耳鍋に該当するものと思われる（足立順司「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財研究所・研究紀要II』静岡県埋蔵文化財研究所1987）。
- ⑥ 未公開資料であるが、西尾市教育委員会松井直樹氏の御好意で掲載させていただきました。
- ⑦ 『熊子第2号遺跡』西尾市教育委員会、1977
- ⑧ 『年報昭和63年度』愛知県埋蔵文化財センター1989
- ⑨ 『新編岡崎市史 資料編下』（1989、3発行予定）に掲載資料。現段階では未公開資料であるが、岡崎市教育委員会、荒井信貴氏の御好意で掲載させていただきました。
- ⑩ 『岡崎城二の丸跡』岡崎市教育委員会1982
- ⑪ ②・③の他に愛知県西春日井郡清洲町土田遺跡など。（『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1987）
- ⑫ 注②の他に愛知県豊橋市東脇貝塚など。（「東脇貝塚」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第二集』1970）
- ⑬ 『長谷元屋敷遺跡』静岡県教育委員会他1987など。

（以下、P.40・41の注）

- ⑭ 柳田国男監修『民俗学辞典』日本民俗学会1951
- ⑮ 注⑭に同じ。
- ⑯ 山村 宏「一の谷中世墳墓群の発掘」『中世の都市と墳墓』1988他
- ⑰ 山村 宏「一の谷遺跡について」『歴史手帖』14—11、1986
- ⑱ 楠元哲夫「中世後半期における集団墓地」『末永先生米寿記念論集』1985
- ⑲ 水野正好「一の谷・光堂山蓮光寺・極楽」の世界』『中世の都市と墳墓』1988

### (3) 火葬施設について

#### ①

2章で述べたように今回検出した火葬施設群は、屋敷地とともに地割りの中に存在し、集落内の一角に群在する状況を呈している。本項では、これらについて整理する。

#### ②

今回検出した火葬施設は、埋土、形状、分布状況の類似から、ほぼ同一時期である可能性は強い。出土遺物は乏しく、時期決定には困難な面が存在するが、Ⅲ-1期に属するものと判断している。以下にその時期決定の根拠を記す。

- SX01・05は床面も若干被熱しているが、これが地山面とした赤褐色粘土層上面よりも若干上方で確認でき、これらは下層包含層を切り込む遺構と理解できる。こうした遺構はⅢ期に属するものが確認できるのみで、火葬施設群も同様である可能性は濃厚である。なお、火葬施設は包含層上面では確認できない。
- SX04はⅡ期遺構と切り合い関係を有し、これらよりも新しい。
- 火葬施設群を囲む溝からは、SD11・32を除き、Ⅲ-1期の遺物が出土している。なお、SD08と11に時期差は認められない。
- 今回は江戸時代以後の遺構は検出されず、遺物も若干見られたにすぎない。
- 今回検出した溝は、掘立柱建物を囲むものを除き、やや深いものとやや浅いものに大別できる。これらは出土遺物から前者がⅢ-2期、後者がⅢ-1期に属する傾向があり、部分的にみられる切り合い関係とも一致する。火葬施設を囲む溝はやや浅いものに属し、これが前者に属する形状のSD27により否定された可能性を考えると、火葬施設群はⅢ-1期に属することが考えられる。

#### ③

今回検出した火葬施設群のうち、火葬施設Aについては数次の使用を考えることができる。つまりこれは火葬骨を他所へ埋納することを前提としたもので、一部で確認されている火葬地をそのまま墓とするものではない。火葬施設Bについても埋土などの状況が前者と類似することや、検出数が1基のみということを考え、同様に性格付けられる。

次に火葬施設群の空間的位置であるが、2章で述べたようにこれらはSD17・18・19・20によって設定された場所のみみられる。この点を重視すると、同地点は遺体の火葬を主目的とした、集落中での「葬送の地」として理解できる。

ところでこうした空間には土葬を主とする地域で一部採用されている両墓制の埋め墓にも通じるものを想定できる。周知のように両墓制とは被葬者に対し、埋め墓と詣り墓の二

つを設定する墓制である<sup>⑭</sup>。遺体は前者に埋葬されるが、ここは特定の時期を過ぎるとほとんど祭られることはなく、外部表象すら設置しない場合もある。また一部の場所では埋め墓を『ステバカ』と呼称するが、これは遺体の持つ性格を明確に示している。一方、もっぱら祭事の対象となるのは後者である。ここでは石塔が建てられるが遺体は無く、わずかに埋め墓の土・被葬者の爪・髪などが形代的に納められるものが多い。つまり、ここには遺体のみならず死を取り巻く空間をも含めて「穢れ」として扱われむしろ軽視する一方、浄化された靈魂のみを祭礼の対象として重視する発想をうかがうことができる<sup>⑮</sup>。火葬施設群と民俗事例をそのまま結びつけてしまうのはいささか安易な感もみられるが、もしこのように考えることができるのなら、火葬施設群埋土中に骨片が残存していることも理解しやすい。

次に、これらを利用した火葬骨を埋葬する墓地の存在を想定することができるが、これについては今回検出することはできなかった。しかし、その具体像として例えば静岡県磐田市一の谷遺跡での集石墓のような墓制を想定している<sup>⑯</sup>。一の谷遺跡は周知のように中世の集団墓地で、墳丘墓・土塚墓・造付け墓・集石墓などさまざまな形状の墓が検出されている。この中で特に注目したいのが集石墓のあり方である。集石墓は、「造墓に際して墓域の選定・規模・構造は規画化された尺度と構築方法」<sup>⑰</sup>がみられ、数量も最も多い。なお、この墓制は一の谷遺跡における最終形態とされており、ほぼ加美遺跡火葬施設群と一致している。

#### ④

以上見て来たように、この遺構群は葬送に直接かかわるものとして注目できる。ただ、現状では類例に乏しく、比較資料の増加をまたねばならない。しかし、こうしたいわば「穢れ」を浄化する神聖な空間を否定し、その性格を今日まで維持し得なかったということは、ここに従来の精神生活にも及ぶ強烈な転換期を認めなければならない。ただし、これは加美遺跡だけに留まらない汎日本的な動向で、16世紀を前後する時期に一部の伝統的な集団墓地は機能を消失しはじめる<sup>⑱</sup>。一方では今日見られる墓地の原形が形成されて来るとの指摘もみられる。だが、葬送に関係する空間全てにおいてこれがみられるわけではない。例えば加美遺跡周辺に今日も存在する数ヶ所の墓地では、例外なく江戸時代の紀年銘を有する石塔や、五輪塔などが現代の墓石として転用されており、これは中世の墓地をそのまま現代まで踏襲した結果<sup>⑲</sup>と考えられる。

一方、こうした遺構はその性格から仏教との関連にも触れる必要がある。火葬が仏教の浸透結果として存在する以上、今後の課題として残される。資料の増加を期待する。

(注は、P37に掲載する。)

#### (4) S X 01~06出土骨片について

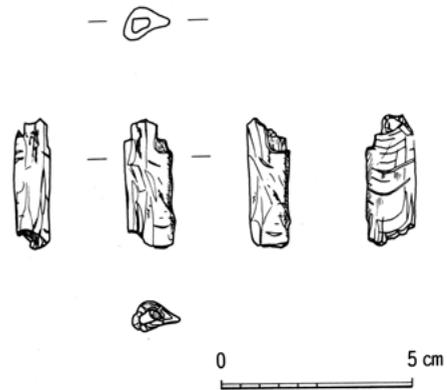
本項ではS X 01~06出土骨片についてその形態から種、部位を検討する。2章で述べたように、ここから出土した骨は全てが細片で全形を留めるものは無い。従ってその多くは、種、部位の同定が困難で、特徴的な一部のものについてのみ決定し得たに留まる。

S X 01~06より出土した骨片のうち部位を決めることができたのは以下のものである。

- ① 肋骨 S X 03, S X 04, S X 05
- ② 指骨 S X 05
- ③ 四肢骨片 S X 01, S X 03, S X 06
- ④ 歯根 S X 01

- ① 一般に哺乳動物の肋骨は、種間における形態差が乏しく種の同定には適していないが、今回S X 03より出土した肋骨のひとつ（第32図）には、骨体下面に長軸方向に壁状に延びる稜が見られ、骨体の太さ、湾曲などの形態的特徴からヒトと判断できる。他の多数の肋骨片についてもヒトとしての決定的な特徴はないものの、否定的な特色は全く認められない。
- ② 形態からヒトの手の中節骨であろうと思われる。（1点のみ）大きさからいって、おそらく第2指もしくは第5指であろう。左右は不明である。
- ③ 四肢骨と思われる骨片にはその表面にハバース管と思われる線構造がみられた。ハバース管とは骨の中を通る細い管で、ヒトは他の動物に比べてこれが非常に太いために骨の表面に縦方向の多数の線となって現れる。
- ④ S X 01から出土した歯根（1点のみ）は歯冠のエナメル質を完全に欠いており、象牙質のみからなる。その形態からヒトの臼歯と思われる。

以上のように、S X 01~06出土の骨片は、一部形態の特徴より判断できたものについては全てヒトと考えられる特色を有していた。また、全ての骨片の表面は細かくひび割れており、白色を呈し、褐色あるいは炭化した黒色をしたものは見られない。これは、十分な酸素のもとで長時間焼かれたことを示している。従って、こうした事実は遺構の状況から推定できる性格とよく一致する。



第31図 肋骨 (S X 03)

## 5章 ま と め

本章では発掘調査の成果についてまとめる。

今回の調査で検出した遺構は、Ⅰ期弥生時代中期、Ⅱ期古墳時代～平安時代、Ⅲ期室町時代の3時期にまとめられるのは前述の通りである。以下、これらの成果をまとめる。

Ⅰ期については方形周溝墓が2基確認されたにすぎないが、周辺に未知の集落跡の存在を想定することができた。

Ⅱ期については竪穴住居15軒を検出しており、竪穴住居で構成される集落を想定し得る。当地域における数少ない調査事例として重要である。

Ⅲ期の遺構は、Ⅲ-1期（15世紀代）、Ⅲ-2期（15世紀末～16世紀代）に区分できる。いずれも溝による区画が設定され、これらによって「屋敷地」が設置されている。ただし、掘立柱建物については明確な変遷を把握できなかった。また、Ⅲ-1期にみられた火葬施設を含む空間は、前述したように周囲にめぐる溝埋土中から出土する遺物の年代を重視すると、Ⅲ-1期にはほぼ限定でき、この時期では集落内に「屋敷地」と「火葬施設群」が近接して設定された景観を想定することができる。次のⅢ-2期はこの空間を否定し設定されたもので、Ⅲ-1期に見られた火葬施設群を含む空間中にも掘立柱建物を囲む溝・井戸などが設定される。従って、それぞれの時期間には、精神面にまで及ぶ「画期」が存在していたことを想定できた。

加美遺跡に近接する野寺町本證寺にはⅢ期段階での、この地域の様子を知る史料が残されている。『本證寺門徒連判状』（以下連判状）がそれである。この史料は、当時本證寺住職に就任した『あい松』と言う人物を中心に寺を守る誓いをつづった連判状で、天文十八年（1549）の年号を有している。『連判状』には114名の連名がそれぞれの居住地とともに記入されている。この様子から、『連判状』段階における土地支配の形状が小規模な在地領主を基軸に展開し、これらが宗教を背景として結束した様子を見ることができ、この中で、小川地区に記入者が多いこと、全体に石川の名を多くみることができるところを注目したい。石川一族の記入者は筆頭の石川忠成（居住地無記入）を含め37名に及ぶ。石川一族はこの地域の存地領主で、優位性の確立時期は不明な点が多いが、15世紀後半代には新たに侵入した松平氏の家臣化している。

次に記入者の居住地区についてだが、総数114名のうち98名までが在地の名称を記入していることから、その多くは本拠に居住していたと考えられる。一方、岡崎居住とした者も16名記入されている。この数は「本證寺門徒」という限定条件付きでの人数で、この点を

考慮するとこれは決して少ない数値とは考えられない。従って、在地領主の中には本拠から切り離され、給人化・城下町集中居住もある程度は進んでいると判断できる。なお、この動きは、松平家臣団を二分した争乱にまで進展する三河一向一揆の勃発～終結（1563～64）によりさらに整理され、本願寺教団が松平氏に許される1583年頃までに一応の完成を遂げるものと思われる。付記しておくが、『連判状』にみる内容は、特定宗派の一寺院に限定されたもので、史料の性格上、地理的・宗教的制約を多分に受けている可能性は残すが、本證寺が三河三ヶ寺の一つとして西三河における本願寺教団の中核的立場を有した寺院であることを考慮すれば、状況把握に大きな不都合は存在しないと考えられよう。

以上みてきたように、史料から石川一族が松平氏の家臣化する15世紀末頃、松平家臣団が形成・安定期に入る16世紀後半に、それぞれこの地域に社会的な変革が予想される。しかし、残念ながらこれが今回検出した遺構にどの程度影響を与えるのか判然とはしない。ただ単に年代の一致という点のみを重視すれば、前者についてはIII-1期と2期との変換期が、後者についてIII-2期の終末が該当し得る。ただし、この点については現状では資料に乏しく、今後考古学のみならず文献史学等の関連分野を含めた総括的な再検討を試みねばならない。

『本證寺門徒連判状』		
石河右近将監 忠 成(花押)	同 石河三郎四郎 長 成(〃)	同 榑原与三左衛門 広 康(〃)
小川 石河四郎三郎 信 成(〃)	小川 石河清三郎 久 成(〃)	同 波倉八郎左衛門 家 次(〃)
わたり 鳥居弥平次 信 茂(〃)	おかさき 松崎宗三 正 次(〃)	安城 酒井小四郎 信 実(〃)
小川 石川助三郎 安 成(〃)	同 浅井甚平 信 吉(〃)	野寺 本多伴七郎 信 光(〃)
同 石河助次郎 久 信(〃)	同 阿部孫大夫 正 次(〃)	同 石河甚六 家 重(〃)
岡崎 石河伴三郎 勝 宗(〃)	同 石河孫助 吉 成(〃)	安城 本多一郎兵衛尉 (〃)
同 石河与十郎 忠 戸(マ)	いづみ 都築又兵衛尉 勝 重(〃)	くまむら 三浦源左衛門尉 家 長(〃)
同 石河助十郎 忠 次(〃)	木戸 石河平四郎 康 忠(〃)	『安城市史資料編』より 以下略
同 石河伝六郎 元 成(〃)		
		わたり 鳥居源七郎入道 忠 資(〃)
		おかさき 羽根田新左衛門 張 繁(〃)
		同 大岡宗六郎 久 次(〃)
		同 内藤橋兵衛 信 成(〃)

主要遺構計測一覽

S B (建物)

番号	調査区別・遺構番号	規模 (m)	時期	種別
1	B区SB02	4.0×—	II	竪穴
2	B区SB01	3.7×3.6	II	竪穴
3	A区SB01	4.0×—	II	竪穴
4	A区SB03	4.2×3.7	II	竪穴
5	A区SB04	4.0×3.2	II	竪穴
6	A区SB05	5.6×5.6	II	竪穴
7	A区SB06	6.2×5.2	II	竪穴
8	A区SB07	4.0×—	II	竪穴
9	A区SB09	6.5×—	II	竪穴
10	A区SB10	—×—	II	竪穴
11	A区SB11	5.0×—	II	竪穴
12	A区SB12	7.5×6.2	II	竪穴
13	A区SB15	5.7×—	II	竪穴
14	A区SB16	6.5×5.2	II	竪穴
15	A区SB17	5.7×—	II	竪穴
16	B区SB10	5.2×4.3	III	掘立
17	B区SB11	4.9×3.5	III	掘立
18	B区SB12	6.6×5.1	III	掘立
19	B区SB13	—×2.5	III	掘立
20	B区SB14	5.2×4.6	III	掘立
21	B区SB15	6.4×3.2	III-2	掘立
22	B区SB16	10.0×3.9	III-2	掘立
23	B区SB17	—×2.9	III-2	掘立
24	B区SB18	—×3.0	III-2	掘立
25	B区SB19	—×2.8	III-2	掘立
26	C区SB01	—×7.4	III	掘立
27	C区SB02	—×3.1	III	掘立
28	C区SB03	5.8×4.6	III	掘立

S Z (周溝墓)

番号	調査区別・遺構番号	時期
1	C区SD03・SD08	I
2	C区SD02・SD09・SK83	I

S E (井戸)

番号	調査区別・遺構番号	時期
1	B区SK44	III-2

S A (柵)

番号	調査区別・遺構番号	時期
1	B区P.164・P.163・P.277・P.276・P272・P.253・P.248	III-2

S D (溝)

番号	調査区別・遺構番号	時期
1	B区SD01	III-1
2	B区SD02	
3	B区SD03	III-2
4	B区SD04	III-1カ
5	B区SD05A	III-2
6	B区SD05B	17C
7	B区SD08	III-2
8	B区SD07	III-1
9	B区SD25	III-2
10	B区SD06	III-2
11	B区SD13	III-1
12	B区SD09	
13	B区SD10	III-2
14	B区SD11	III-1
15	B区SD15	
16	B区SD14	
17	B区SD16	III-2
18	B区SD18	III-2
19	B区SD19	III-2
20	B区SD12	III-2カ
21	B区SD26	
22	B区SD20	II
23	B区SD24	
24	B区SD21	
25	B区SD23	
26	B区SK58	III-1
27	B区SD27	III-2カ
28	A区SD13	II
29	A区SD10	
30	A区SD09	III-2
31	A区SD08	III-1
32	A区SD07	III-1
33	A区SD05	III-2
34	A区SD06	III-2
35	A区SD01	III-2
36	A区SD03	III-1
37	A区SD04	
38	A区SD02	III-1
39	C区SD05	
40	C区SD06	

## S K (土坑)

番号	調査区別・ 遺構番号	長・短・深 (m)	時 期
1	B区SK08	— 1.1 0.2	III-1
2	B区P.168	0.7 0.5 0.1	II
3	B区SK27	— 2.9 0.1	II
4	B区SK65	3.1 1.6 1.0	III-1
5	B区SK38	1.4 1.1 0.1	II
6	B区P.455	0.6 0.5 0.5	II
7	B区P.469	0.2 0.2 0.2	III-1
8	B区SK57	1.3 0.8 0.2	
9	B区P.531	0.3 0.2 0.5	III-1
10	B区P.541	0.3 0.2 0.1	III-1
11	B区SK60	1.0 0.7 0.3	II
12	A区SK04	1.1 0.5 0.2	II
13	A区P.39	0.4 0.6 0.3	II
14	A区SK07	0.1 0.1 0.1	II
15	A区SK08	3.1 1.6 0.2	II
16	A区SK92 (SB06内)	0.8 0.6 0.3	II
17	A区SK11	2.2 2.0 2.9	III-1末~ III-2初
18	A区SK100	1.1 1.0 2.5	III-1末
19	A区SK106	— — 0.3	III-1
20	A区SK29	— — 0.1	II
21	A区SK120	3.6 2.1 1.0	III-1
22	A区SK41	— 0.7 0.1	II
23	A区P.110	0.1 0.1 0.3	II
24	A区SK43	0.9 0.7 0.1	II
25	A区P.280	0.4 0.4 0.6	II
26	A区P.263	0.3 0.3 0.2	II
27	A区SK49	3.9 2.4 0.2	II
28	A区SK60	0.9 0.9 0.3	II
29	A区P.138	0.4 0.3 0.5	II
30	A区SK66	— — 0.1	II
31	C区SK03	2.4 1.9 0.4	III-1
32	C区SK08	— 2.5 0.2	II
33	C区P.44	0.5 0.3 0.4	II
34	C区P.35	0.7 0.5 0.1	II
35	C区P.51	0.3 0.2 0.2	II
36	C区P.25	0.2 0.2 0.2	II

## S X (火葬施設, 埋納土坑)

番号	調査区別・ 遺構番号	長・短・深 (m)	時 期
1	B区SK66 (火葬施設)	1.0 0.5 0.1	III-1か
2	A区SK15 (火葬施設か?)	1.3 0.7 0.05	III-1か
3	A区SK22 (火葬施設)	1.2 0.7 0.3	III-1か
4	A区SK20 (火葬施設)	1.0 0.8 0.2	III-1か
5	A区SK17 (火葬施設)	1.0 0.4 0.1	III-1か
6	A区P.42 (埋納土坑)	0.5 0.4 0.5	III-1か

## 遺物計測一覽

No.	口 径	底 径	高 さ	登録番号	No.	口 径	底 径	高 さ	登録番号
1	17.7	—	(8.3)	E-202	48	22.8	—	(7.2)	E-65
2	4.9	3.2	14.2	E-203	49	6.3	3.2	8.4	E-69
3	—	—	—	E-201	50	19.2	—	6.4	E-67
4	—	11.0	(2.2)	E-128	51	17.3	—	(7.0)	E-66
5	—	9.7	(1.5)	E-127	52	—	10.3	(7.3)	E-68
6	11.9	5.6	3.5	E-123	53	18.4	15.0	4.4	E-50
7	12.0	5.5	3.8	E-124	54	13.2	9.5	4.5	E-51
8	1.7	—	(5.3)	E-125	55	—	—	(10.0)	E-53
9	17.8	—	(4.8)	E-126	56	19.0	—	3.3	E-110
10	9.3	5.0	3.0	E-1	57	16.5	—	3.2	E-55
11	14.7	—	(10.0)	E-3	58	12.6	—	(1.2)	E-56
12	12.0	—	(7.6)	E-2	59	19.0	—	(4.5)	E-57
13	—	9.3	(2.7)	E-6	60	14.1	9.8	3.8	E-58
14	—	5.5	(2.1)	E-12	61	—	—	3.9	E-59
15	—	5.0	(1.7)	E-5	62	11.9	6.4	3.8	E-90
16	13.0	7.2	3.3	E-4	63	—	—	(1.3)	E-89
17	14.2	—	3.2	E-7	64	19.2	—	2.2	E-60
18	18.1	—	(3.0)	E-8	65	—	—	(6.9)	E-61
19	9.4	—	(4.3)	E-9	66	12.8	—	(5.5)	E-62
20	—	8.0	(4.1)	E-10	67	29.8	—	(20.0)	E-63
21	—	—	—	E-11	68	—	—	—	E-88
22	9.3	4.5	(4.2)	E-13	69	20.8	—	(17.7)	E-132
23	11.0	—	(2.8)	E-14	70	12.7	—	8.3	E-206
24	19.2	—	(6)	E-16	71	—	7.8	(1.8)	E-205
25	13.9	—	(4.5)	E-15	72	10.8	5.7	1.8	E-207
26	15.0	11.7	4.1	E-17	73	—	6.8	(1.5)	E-204
27	18.2	—	(2.5)	E-19	74	11.8	—	4.0	E-85
28	23.7	—	(6.6)	E-21	75	12.0	6.0	4.5	E-161
29	4.5	—	(1.8)	E-20	76	19.9	11.0	3.0	E-162
30	11.0	4.0	2.0	E-18	77	9.3	5.1	4.2	E-121
31	12.0	—	3.8	E-22	78	9.4	6.3	4.8	E-115
32	—	8.0	(2.3)	E-23	79	12.4	5.3	3.8	E-98
33	15.4	10.7	3.6	E-28	80	11.8	5.7	4.2	E-99
34	15.9	7.4	5.6	E-25	81	12.5	—	4.7	E-92
35	—	7.0	(3.0)	E-26	82	14.6	—	2.0	E-107
36	—	5.8	(2.2)	E-27	83	14.2	—	2.8	E-95
37	—	15.3	(3.5)	E-29	84	12.5	—	2.4	E-97
38	17.2	—	3.7	E-32	85	13.1	—	3.3	E-102
39	20.1	—	19.9	E-31	86	14.0	7.5	3.1	E-176
40	14.2	9.6	10.3	E-34	87	—	12.7	(4.8)	E-173
41	25.4	—	(14.6)	E-167	88	18.0	—	(3.7)	E-112
42	13.3	—	8.0	E-130	89	33.8	—	(4.0)	E-179
43	26.0	—	(16.7)	E-168	90	—	12.2	(3.3)	E-142
44	25.8	—	(5.3)	E-37	91	—	10.0	(2.5)	E-146
45	20.5	—	(6.9)	E-36	92	—	3.9	(1.6)	E-144
46	15.4	—	(3.9)	E-38	93	19.0	—	(2.5)	E-147
47	24.3	—	(4.8)	E-39	94	24	—	4.8	E-149

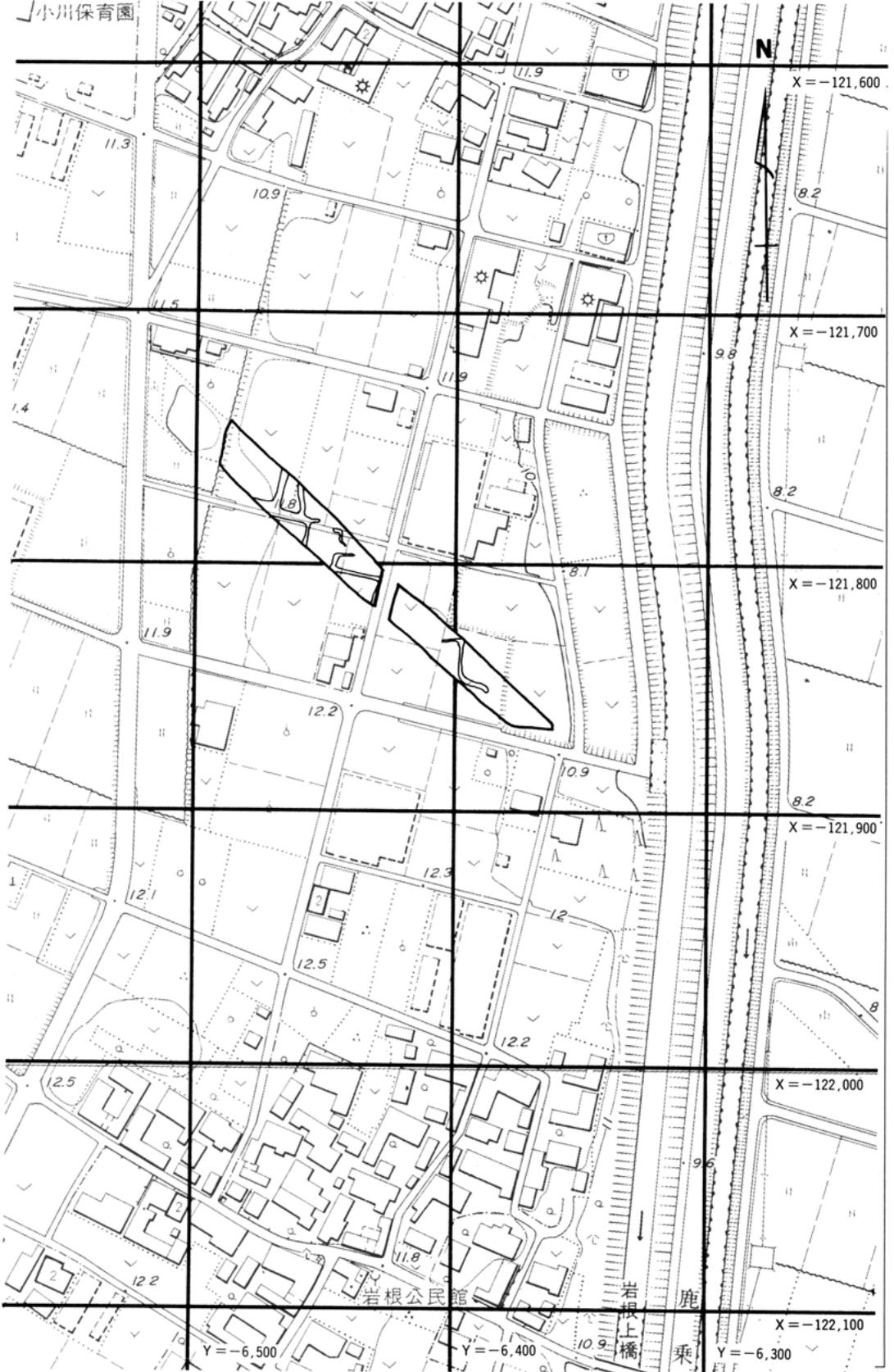
No.	口 径	底 径	高 さ	登録番号	No.	口 径	底 径	高 さ	登録番号
95	—	5.3	(1.3)	E-154	144	12.5	5.3	2.8	E-198
96	—	6.6	(1.0)	E-156	145	—	—	—	E-197
97	8.2	—	(1.7)	E-155	146	15.8	7.2	4.7	E-101
98	—	5.4	1.2	E-152	147	16.6	—	(3.9)	E-94
99	23.4	—	(3.4)	E-153	148	—	5.0	1.9	E-172
100	8.8	5.0	1.9	E-164	149	7.5	3.6	2.4	E-177
101	8.8	5.0	1.9	E-166	150	8.3	6.0	1.8	E-150
102	—	5.3	—	E-165	151	26.4	—	(7.7)	E-30
103	23.9	—	(2.7)	E-151	152	11.0	—	(5.6)	E-189
104	—	—	(1.1)	E-157	153	10.8	—	(3.3)	E-185
105	—	—	(9.5)	E-159	154	11.0	—	(5.5)	E-192
106	30.2	—	(3.6)	E-160	155	—	4.2	(1.4)	E-188
107	—	5.0	(3.4)	E-81	156	—	3.2	(1.1)	E-191
108	—	11.8	(2.7)	E-82	157	10.3	5.2	2.2	E-109
109	—	—	—	E-84	158	9.5	—	(1.9)	E-120
110	30.5	—	(4.7)	E-83	159	—	4.7	(0.5)	E-174
111	—	6.6	(2.2)	E-76	160	11.0	5.9	2.3	E-187
112	—	6.4	(1.7)	E-79	161	—	6.3	(0.8)	E-186
113	10.0	4.4	2.0	E-80	162	3.3	3.7	(2.8)	E-184
114	—	10.7	(2.1)	E-78	163	19.0	—	(2.8)	E-111
115	—	11.3	(4.8)	E-77	164	12.3	—	3.7	E-175
116	7.6	5.2	1.8	E-75	165	24.2	—	(4.3)	E-182
117	12.0	—	(4.0)	E-140	166	24.0	—	(7.4)	E-104
118	—	4.9	(3.3)	E-135	167	20.4	—	(2.7)	E-180
119	23.5	—	(7.3)	E-139	168	23.4	—	(6.9)	E-181
120	—	—	—	E-137	169	25.3	—	(5.5)	E-183
121	—	4.6	(1.5)	E-136	170	—	—	—	E-193
122	11.5	—	(2.4)	E-134	171	12.0	—	(2.6)	E-171
123	8.5	6.2	1.5	E-138	172	—	5.1	(0.8)	E-114
124	—	6.0	2.3	E-169	○単位はcm。 ○( )の数値は残存値。				
125	13.5	—	(4.0)	E-170					
126	5.2	2.3	1.6	E-171					
127	12.5	—	(2.8)	E-41					
128	29.2	—	(11.0)	E-43					
129	—	13.2	(7.5)	E-44					
130	—	14.7	(7.3)	E-45					
131	—	(11.3)	(5.5)	E-47					
132	—	12.0	(5.5)	E-46					
133	24.5	—	13.5	E-48					
134	23.2	—	(7.4)	E-42					
135	—	—	—	E-49					
136	—	11.3	3.9	E-70					
137	10.6	5.9	1.8	E-71					
138	—	6.8	(3.8)	E-72					
139	32.8	—	(11.3)	E-73					
140	12.5	5.8	4.0	E-194					
141	—	8.4	(1.8)	E-196					
142	—	5.8	(1.3)	E-195					
143	23.1	—	(4.9)	E-199					

図 版



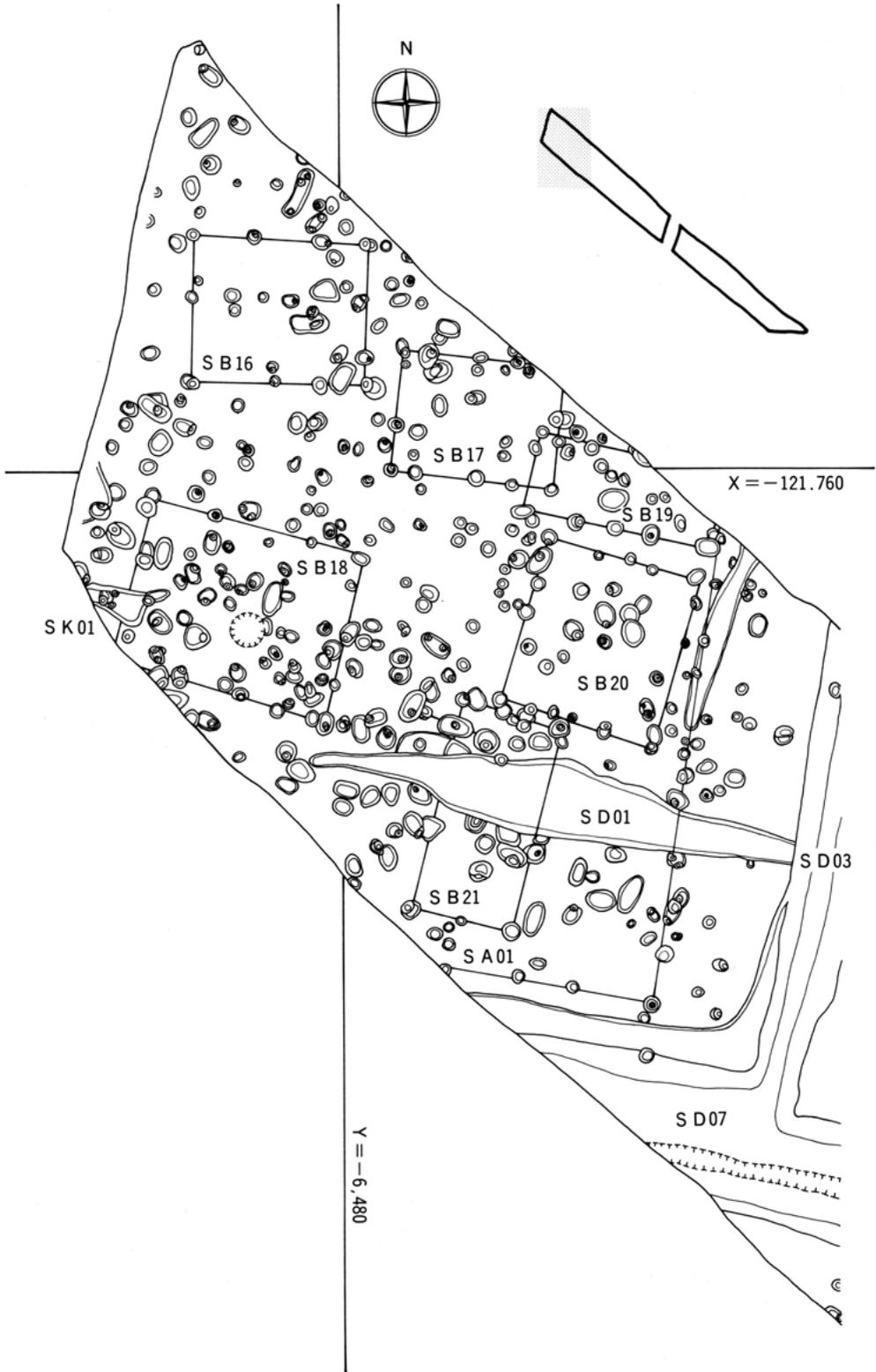
図版1 周辺地形

小川保育園

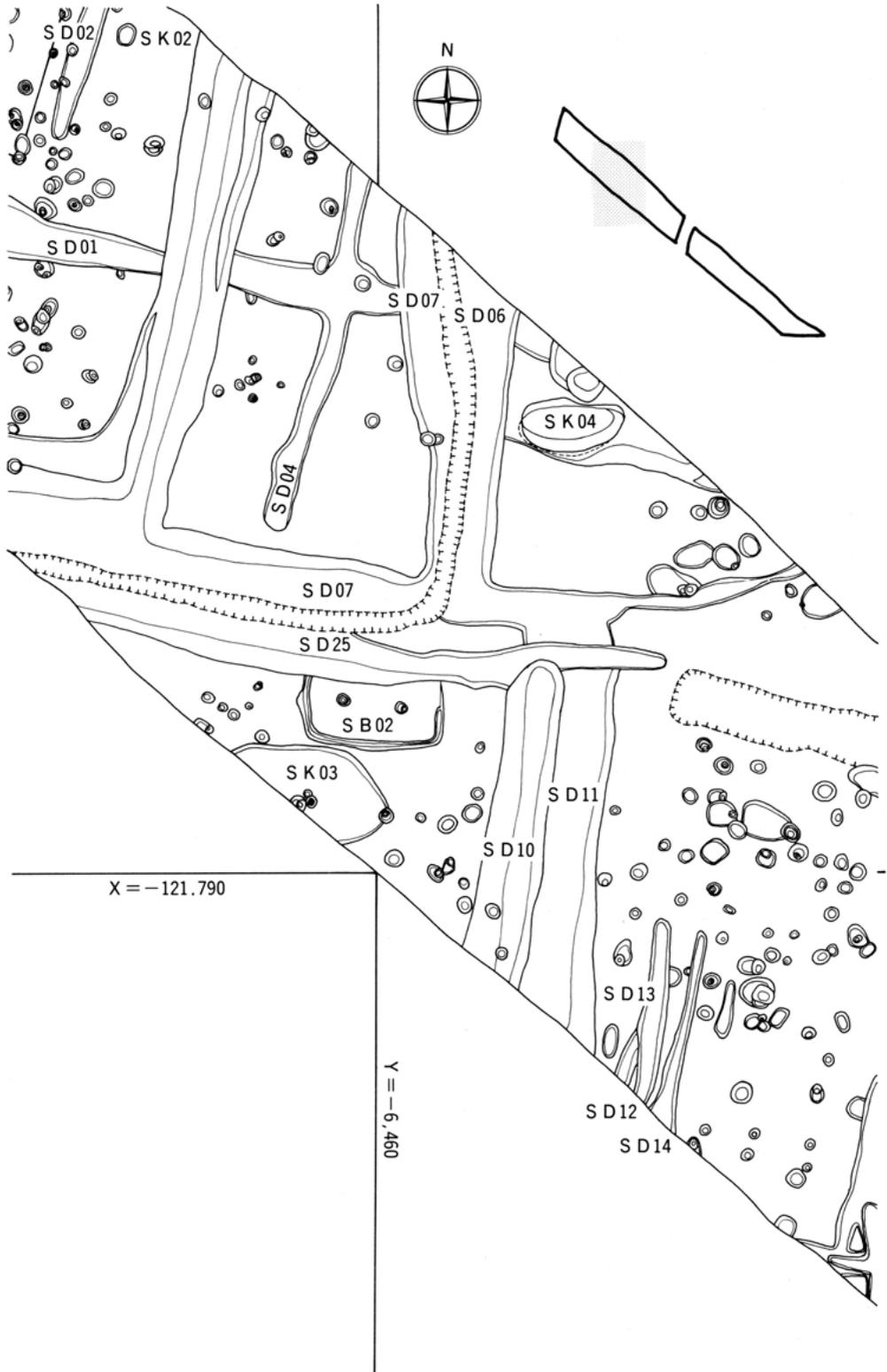


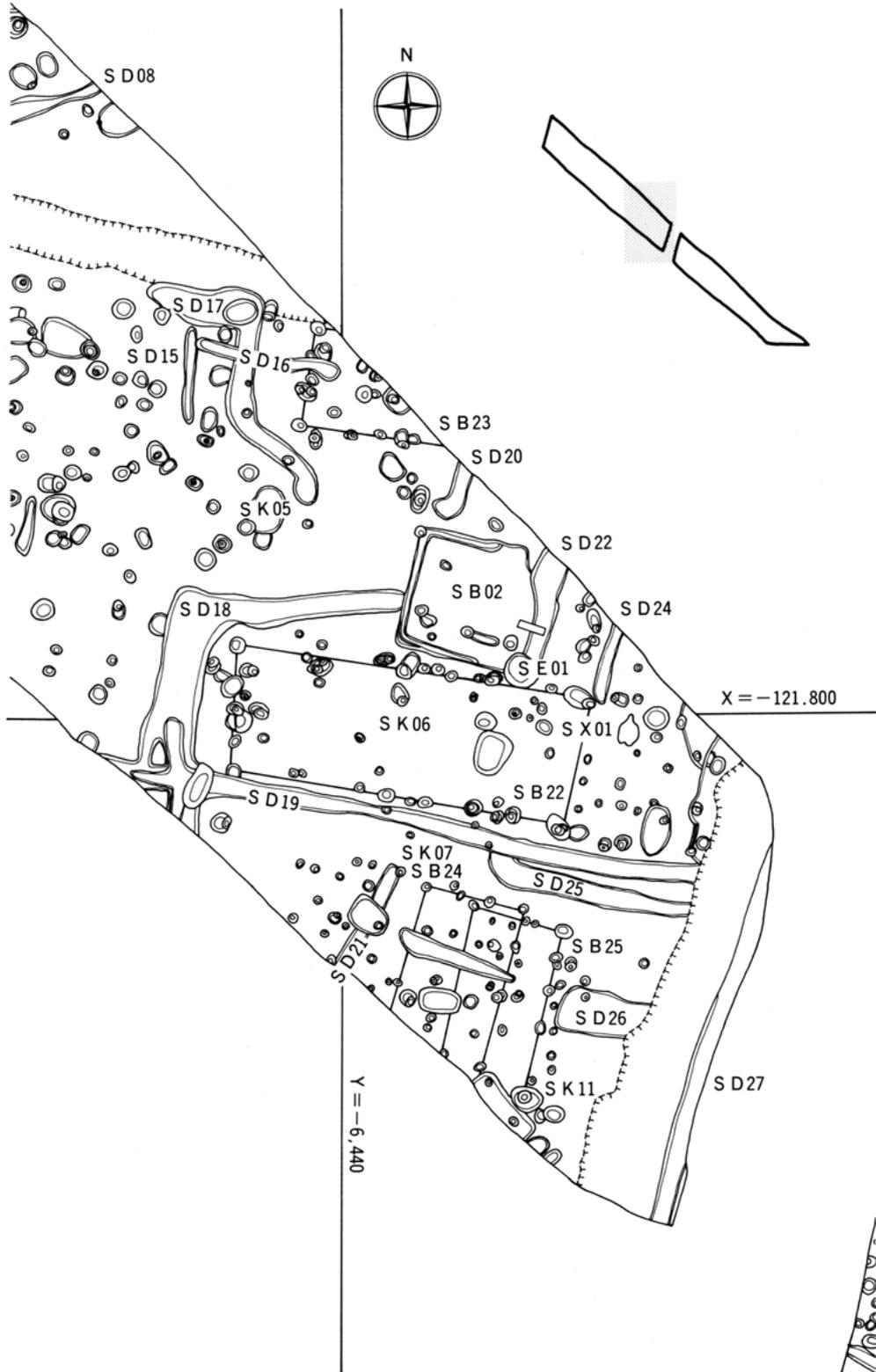
1 : 2500 (遺構はⅢ-2期のみ表現)

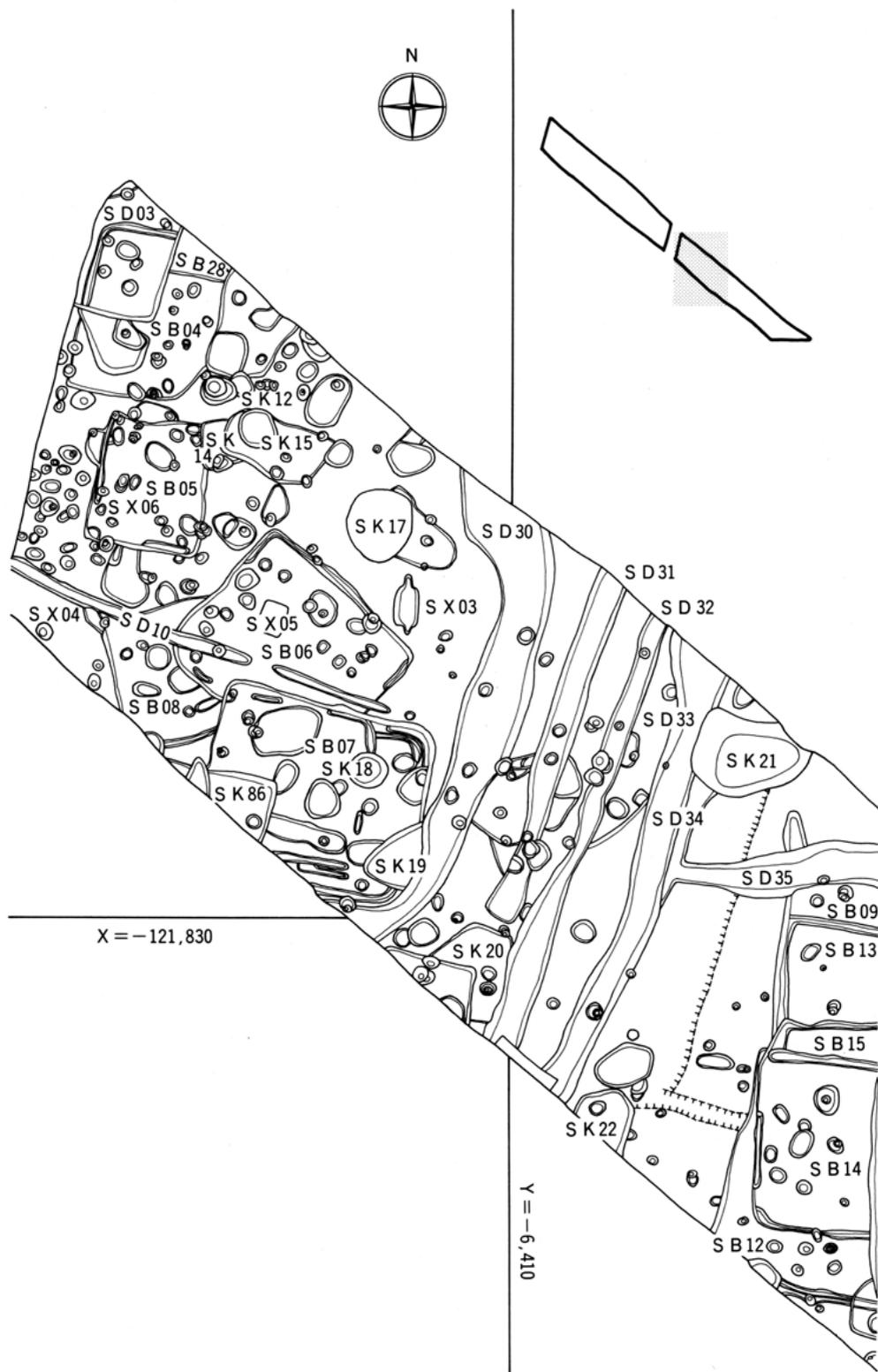
図版2 遺構図①

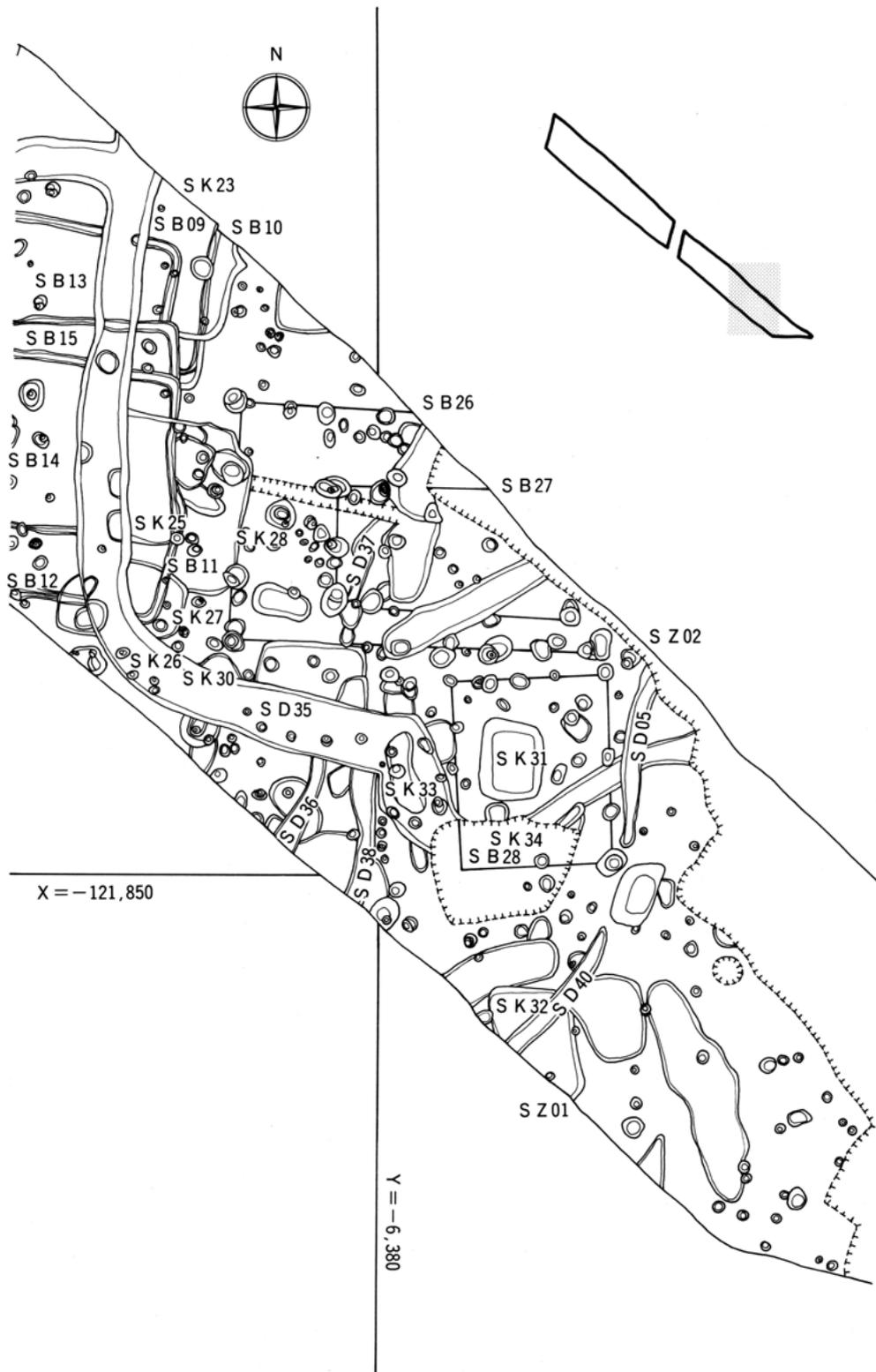


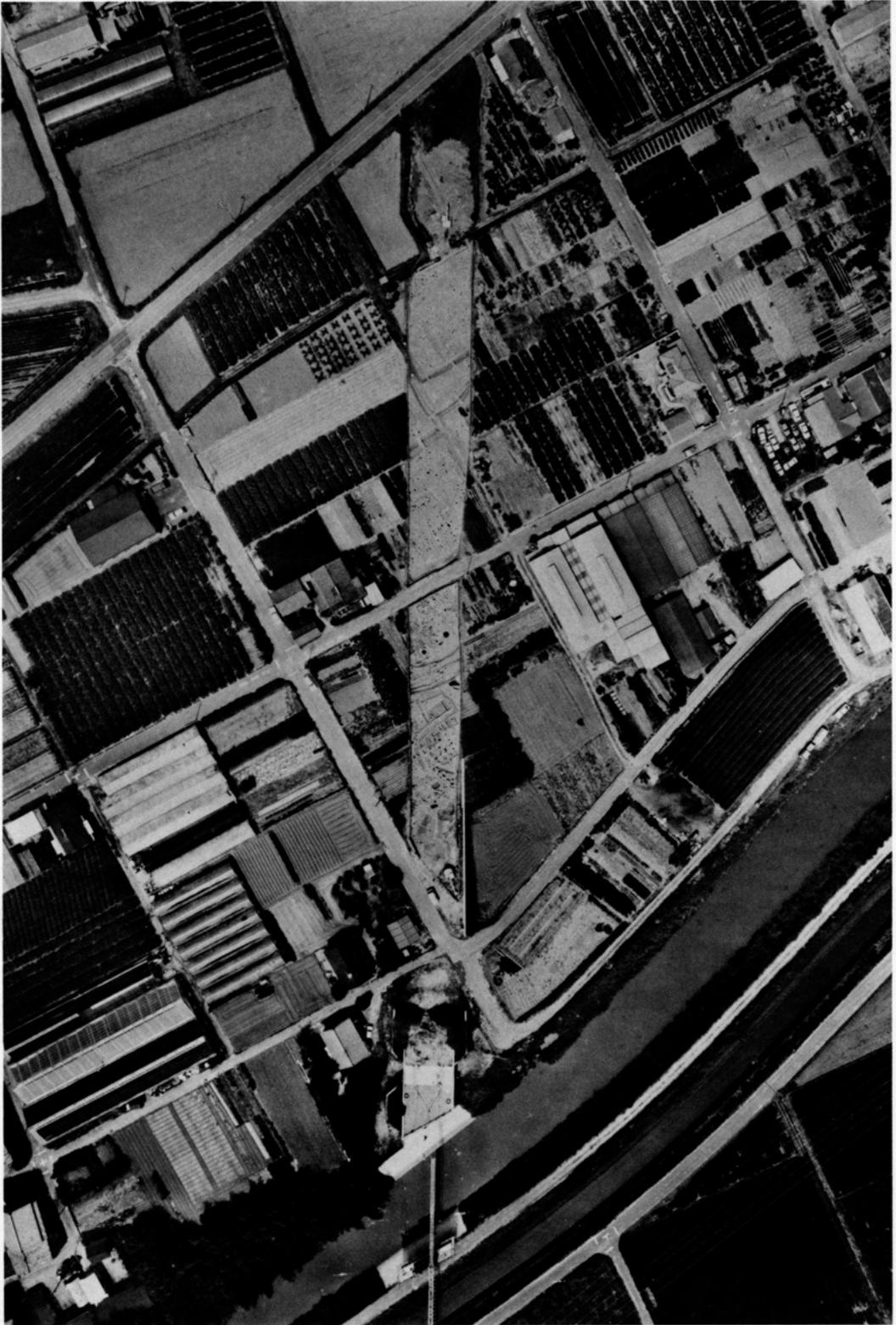
図版3 遺構 図②





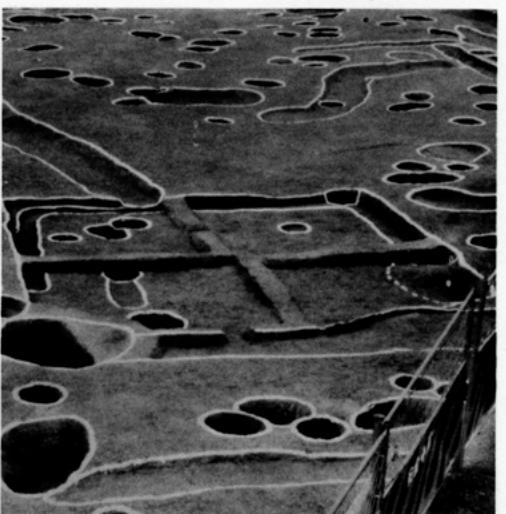
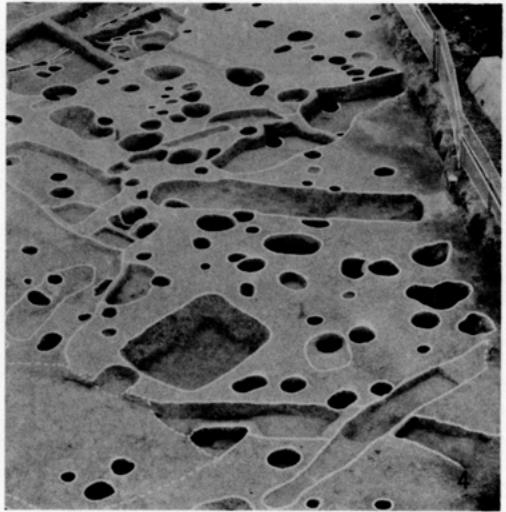
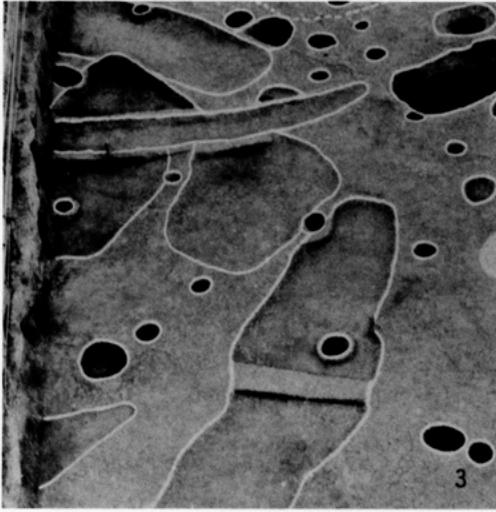




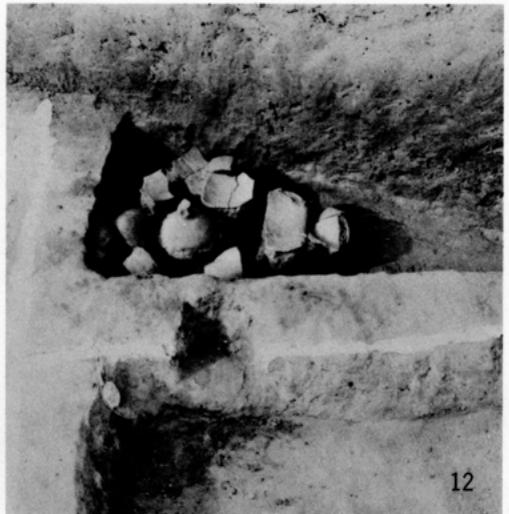
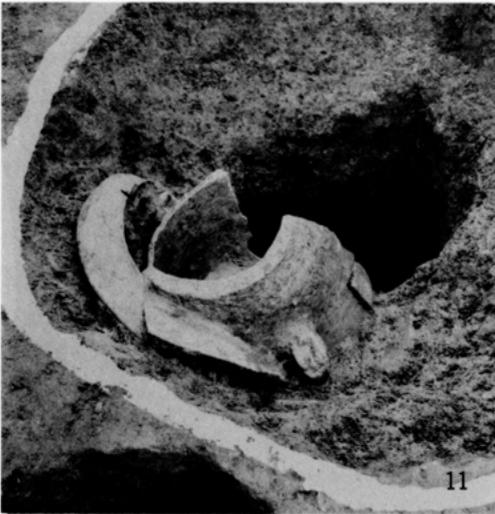
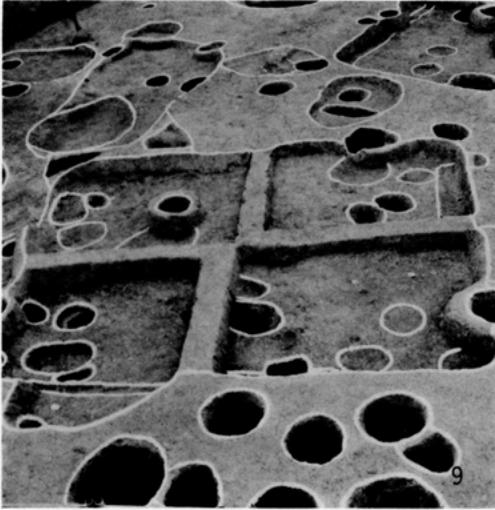




1 調査前風景 2 遺構遠景 (A・B区)



3 S Z 01      5 S Z 01北周溝出土遺物      7 S B 06・07  
4 S Z 02      6 S Z 02南周溝出土遺物      8 S B 02



9 SB05

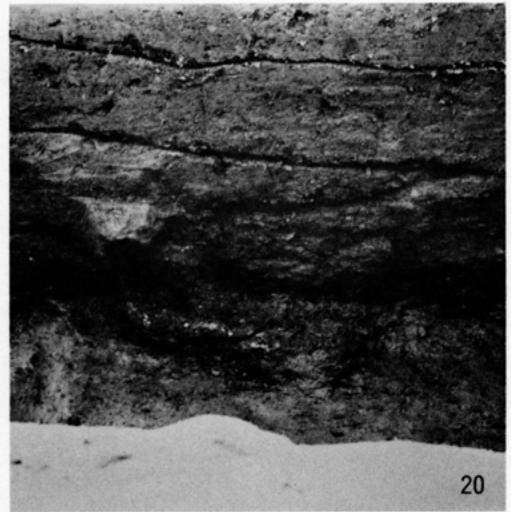
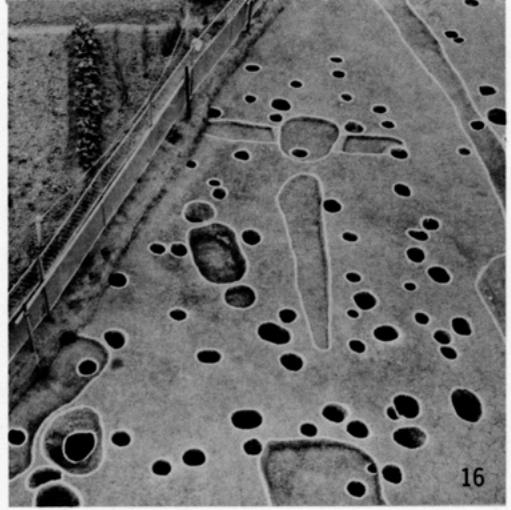
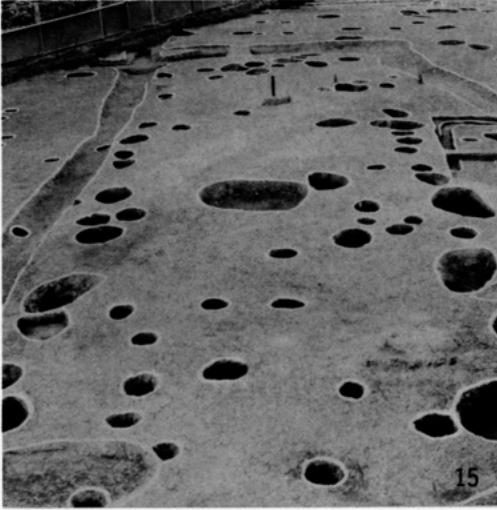
10 SK16 (SB05付属施設)

11 土坑A (SK11)

12 SB04遺物出土状況

13 SB10・11

14 屋敷地 (B区)



15 掘立柱建物 (S B22)

16 // (S B24・25)

17 火葬施設群 (矢印)

18 S X03

19 S X03

20 S X03埋土



21



22



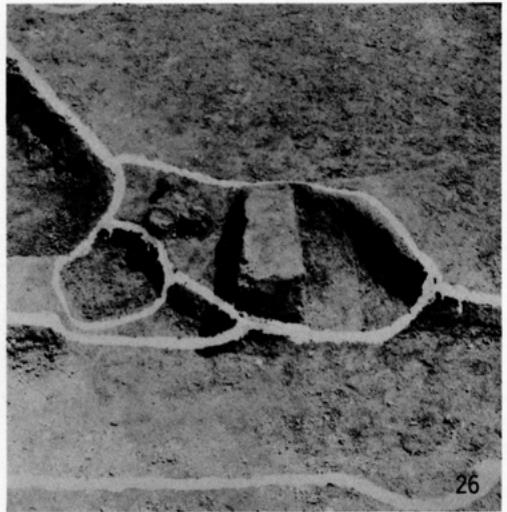
23



24

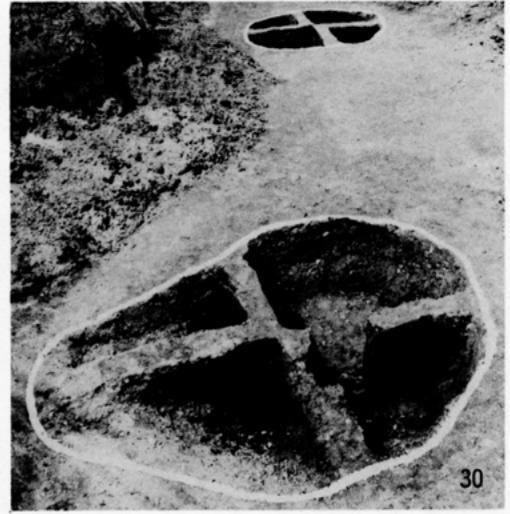
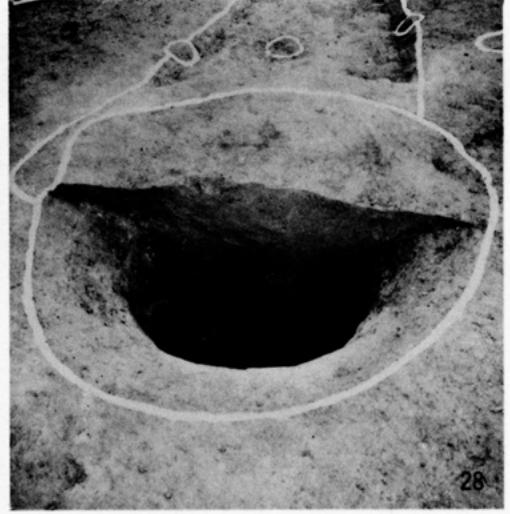
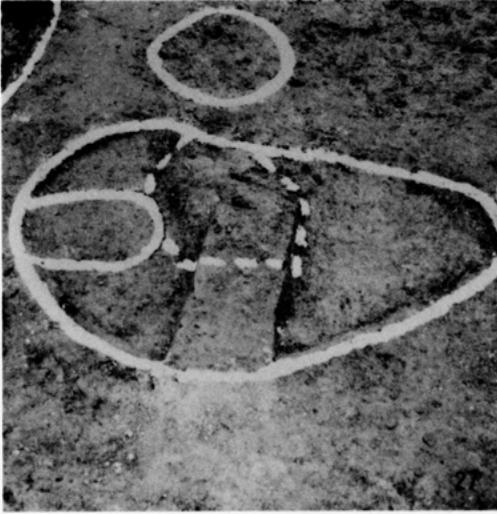


25



26

21 S X 03被熱状況    23 S X 01    25 S X 04  
 22 S X 03補修痕跡    24 S X 01被熱状況    26 S X 05



27 S X02

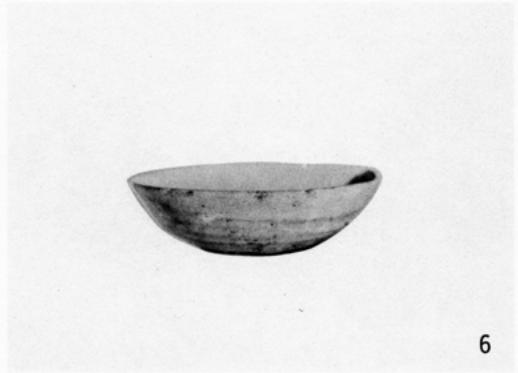
28 土坑C (SK17)

29 土坑C断ち割り (SK17)

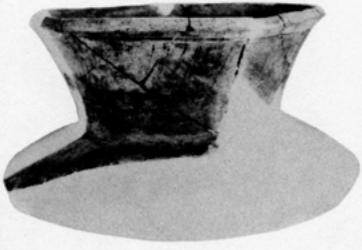
30 土坑C底面

31 SK17遺物出土状況

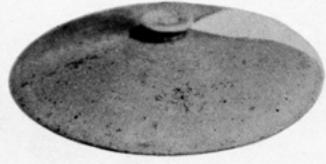
32 SD01内貝層







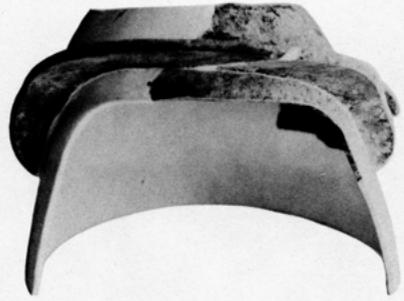
41



55



67



69



70



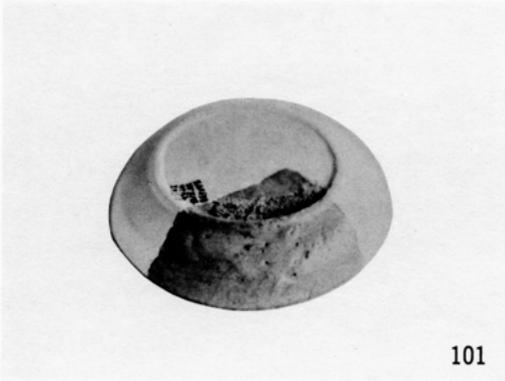
73



88



100



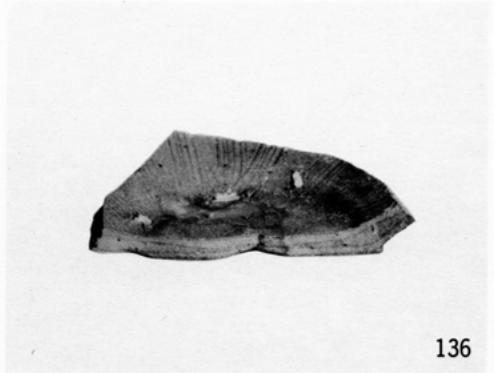
101



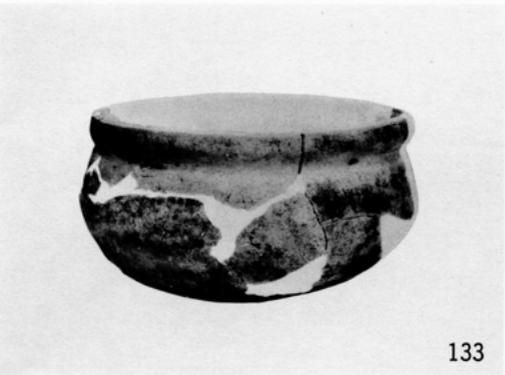
109



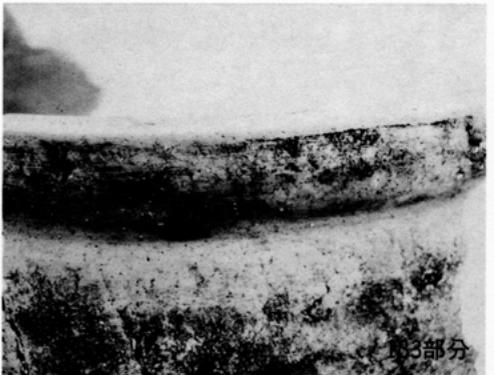
126



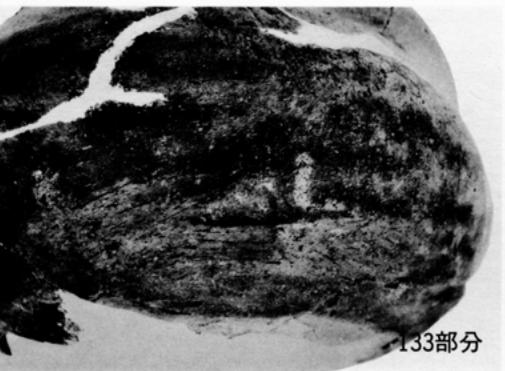
136



133



133部分



133部分



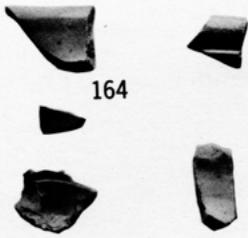
分



138



154



164

中国陶磁



184

185

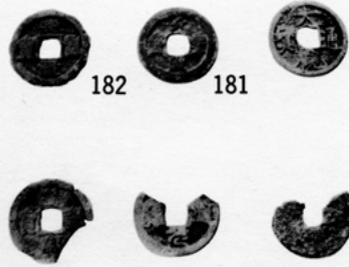
186

硯



72

緑釉陶器



182

181

182

183

錢貨



179

177

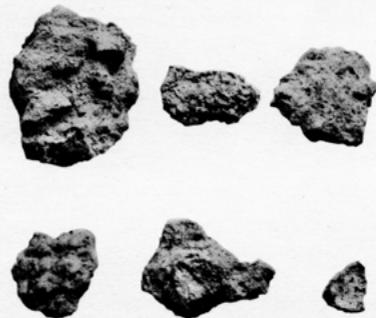
176

175



173

金属製品



鉄滓

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第8集

# 加 美 遺 跡

平成元年3月31日

編 集 財団法人  
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西濃印刷株式会社